

<卒業論文>

# 開発をめぐる地域住民の対応

～武甲山開発と、高尾山開発の事例から～

2008年1月31日

総合政策学部4年 辻本志郎

学籍番号：70405558

アドレス：[s04571st@sfc.keio.ac.jp](mailto:s04571st@sfc.keio.ac.jp)

## 要旨

秩父盆地にそびえる独立峰である武甲山は、地元の人々の信仰の対象であり、また生活の中心であった。しかし、セメントの原料である石灰岩の山である点に注目され、日本の高度発展に伴い崩された。移り変わってゆく山の姿を目の当たりにしながらも、秩父の人々が開発に対して反対運動などを行った記録はほぼない。なぜだろうか。

本稿では、秩父の信仰や、開発の歴史、武甲山の変容を見守ってきた人々の思いなどを文献調査とインタビュー調査によって明らかにした。そして、秩父で反対運動が起きなかった原因をさぐるために、健康被害が起きなかった点や、地元利益がある点などに着目しながらいくつか仮説を立てた。

続いて、他の地域における山の開発とそれに対する住民の反応を比較検討し、上記の仮説を確認した。特に高尾山のトンネル開発は、信仰の山である点や、開発による健康被害が少なかった点などが秩父の状況と似ている半面、反対運動が起きた事例として注目した。

「反対運動が起きなかった開発事例」に着目しながら、明治以降の日本における開発と住民の対応を追った。

## キーワード

「武甲山」、「秩父」、「高尾山」、「開発」、「住民運動」

# 目次

## 序論

- ・問題意識
- ・仮説の提示
- ・研究対象
- ・研究手法の提示
- ・先行研究の提示
- ・研究の意義と限界
- ・本論の構成

## 本論

### 1 章：武甲山の開発

- 1－1．秩父における武甲山
  - 1－1－1．武甲山という山
  - 1－1－2．生活の一部としての武甲山
  - 1－1－3．信仰
- 1－2．開発の歴史
  - 1－2－1．秩父セメント以前
  - 1－2－2．秩父セメント株式会社
  - 1－2－3．現在のセメント業
  - 1－2－4．セメント業者と二つの資料館
  - 1－2－5．秩父における他の産業
- 1－3．インタビュー
  - 1－3－1．秩父出身のジャーナリストへのインタビュー
  - 1－3－2．御嶽神社の神主へのインタビュー
  - 1－3－3．清水武甲氏の親族へのインタビュー
  - 1－3－4．アマチュアカメラマンへのインタビュー
- 1－4．仮説の提示

### 2 章：高尾山の開発

- 2－1．山の開発と反対運動
  - 2－1－1．足尾銅山の例
  - 2－1－2．千葉の山々の例
  - 2－1－3．比較検討する前に
- 2－2．高尾山の歴史
  - 2－2－1．信仰

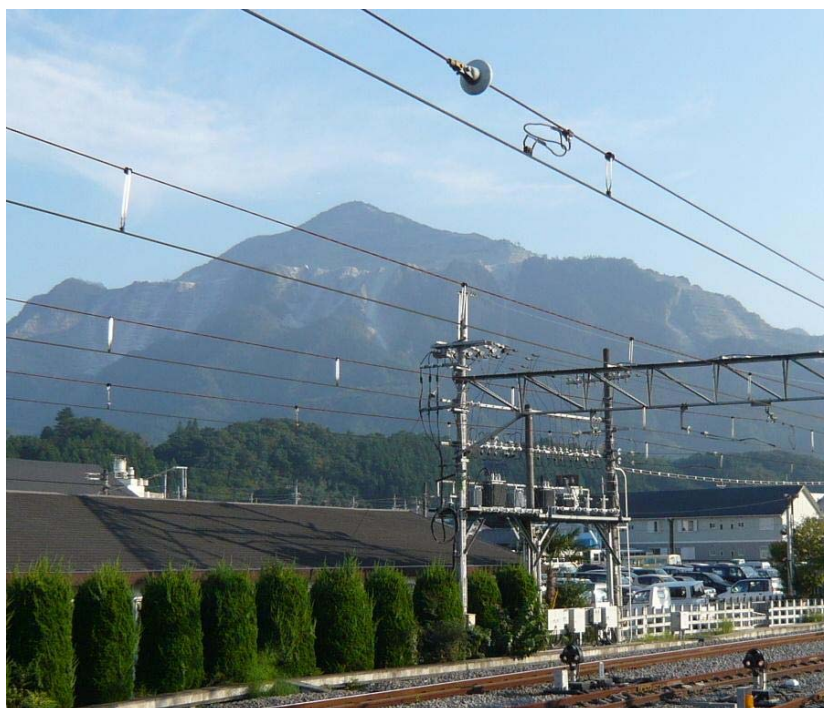
- 2-2-2. 開発の歴史
- 2-2-3. 「高尾山の自然を守る市民の会」と高尾山天狗裁判
- 2-3. インタビュー
  - 2-3-1. 「市民の会」事務局長へのインタビュー
  - 2-3-1. 浅川金比羅神社神主へのインタビュー

結論

参考・引用資料

## 序論

### <問題意識>



<写真1>秩父鉄道景山駅からみた武甲山の姿。石灰岩の採掘により、頂上が荒々しく削られている様子が見て取れる。(2007年9月筆者撮影)

秩父<sup>1)</sup>の文化・風土の象徴である武甲山は近代化後、石灰岩の山であることが注目され、

---

<sup>1)</sup> この場合の「秩父」とは、秩父盆地を中心とした秩父地域の事である。「秩父市」や「横瀬町」などの地名はその秩父地域内に属するものである。名称がややこしいが、秩父市を示す場合には「市」を付ける

開発の対象となった。特に戦後は開発が活発化し、山頂が削り取られ標高が 40 メートル低くなった。秩父の町からもその無残な姿が見て取れる。今でも毎日一度爆薬を使って岩を崩しており、昔ほど爆発音（はっばの音）が響き渡らない様工夫がなされているものの、煙の舞う様子は目に付く。

秩父は有名な秩父夜祭や、三十四の札所があることから明らかなように、信仰の深い地域だ。その信仰の中心の一つであった武甲山があのような姿になってしまい、このまま開発が進めばますますもとの堂々たる姿の面影はなくなっていく。山を支えていた頑丈な石灰岩部分が剥がし取られることにより、残された部分もいずれ崩れるともいわれている。それらの事に対し、地元の人々はどう思っているのだろうか、と言う所から私の問題意識は始まる。

旅行で秩父を訪れた私にとって、地域のシンボルであり圧倒的な存在感を示す山があのような姿になっている事がとても不自然であり、異様だった<sup>(2)</sup>。以前接した地元の人からは、武甲山の無残な姿を嘆くとともに、開発を始め秩父の産業を潤した秩父セメント（現太平洋セメント）に対するある種の尊敬のニュアンスが読み取れた。複雑な感情がからんでいるのだろう。

本論分では、武甲山の開発と、それに対する地元住民の対応を、歴史と地元の人々の声を調べる事によって考察していきたい。また、他の地域における開発事例も合わせて取り上げることによって、色々な時代や状況の下で開発に対する住民の対応がどう変化してきたかを見たい。以上の作業を進めることによって、秩父の事例を相対化させるとともに、開発をめぐる住民の意識の変化や時代の流れを明らかにしていきたい。

## < 仮説の提示 >

日本は開国以来、急速な近代化を迫られた。その過程で、インフラの整備や工業の発達には急務であり、またそのために大量の資源を必要とした。戦後の高度経済発展期においても状況は同じであり、首都圏にも近い秩父はその需要を賄うのにもってこいの場所であった。その結果、民間企業である秩父セメントなどが国と結託し、国策的に開発が進められていったのではないだろうか。その様な状況の中、地元住民は何を感じていたであろうか。地元産業としてのセメント業を一方では受け入れつつ、秩父の文化の中心であり続けていた武甲山の開発・破壊に対しては快く思っていなかったのではないか。ただ、多くの雇用をもたらすと同時に大量の税を納めることなどによって地元を潤し、また国家政策的に行われた事業に異議を申し立てられなかったのではないか。武甲山がある横瀬町は人口 1 万

---

ことによって区別する。

<sup>2</sup> 武甲山は、山と溪谷社が出している「日本の二百名山」に選ばれている。しかしながら、3 ページに渡る武甲山の記述の中に、石灰岩開発については一切触れられていない。また、掲載されている山の写真も、削られた後が写らないよう山の南側（市街地から見て裏側）から移したものであった。

の小さな町でありながらも、平成の大合併の時代に合併をせずに存続する。町の道路や公共設備はとても綺麗に整備されている。今なお開発を通して恩恵を授かっているため、声を大にして開発に反対をする事ができないのか。

以上が研究当初に私が抱いた仮説であり、本研究においては第1章がそれに対応するものである。研究を進めるにあたり興味関心の幅が広まったため、1-4において1章をまとめるとともに、再び仮説を立てた。その検証の過程が2章となる。

## <研究対象>

### ・秩父における研究の主な研究対象

秩父市出身のカメラマンである清水武甲（1913～1995）は、武甲山の自然や開発による変容に関して多くの著作を残した。秩父における自然保護のキーマンである清水や、彼を中心とする地元教師や生物学者の書物。

武甲山の開発過程で、武甲山を取り巻く環境や文化を記録に残すために、開発業者数社が出資し、横瀬町や秩父市との協力の下で武甲山総合調査が行われた（1977～1979）。その調査報告である、『秩父武甲山 総合調査書』の各編。また、一連の調査をもとにして建設された、横瀬町歴史民俗資料館、及び秩父市にある武甲山資料館における展示。

秩父出身で長年武甲山を見てきたアマチュア写真家やセメント業に関わってきた人、武甲山の変化に対して疑問を持って活動をしている人やその関係者などにインタビュー調査を行った。人選に関しては、2006年5月29日放送の「小さな旅 武甲山をみつめて～埼玉県横瀬町～」(NHK)にて取り上げられていた人を中心に行った。

### ・その他の主な研究対象

戦後から現在にいたるまでの開発や公害、またそれらに対する住民の反対運動を扱った書物。

武甲山の開発に対する主な比較対象として、80年代から続く高尾山のトンネル開発及びそれに対する反対運動を取り上げる。行政主導で行われる開発に対して、裁判や各種行事を通して開発反対を主張する「高尾山の自然をまもる市民の会」の活動を把握するために「市民の会」のホームページを研究対象とする。また、運動に関わる人々がどのような思いで参加しているのかを知るために、幾人かにインタビュー調査を行った。

## <研究手法の提示>

1章の武甲山の開発に関しては、文献にあたり、近代になってからの秩父の歴史を調べる。特に大正期に秩父セメントが創立された頃の秩父の状況や、戦後に武甲山の石灰岩の採掘が本格化し始めてからの開発の歴史、及び現在の秩父の産業状況などをまとめる。また、武甲山やセメント業に大きな変化がもたらされた当時の地元の人々の反応を知るため、上記のように色々な立場から武甲山に関わってきた人々へのインタビュー調査を行う。

2章の高尾山の開発に関してもほぼ同様で、歴史調査には文献を使用し、開発の様子や現在も行われている反対運動の調査にはインタビュー調査も併用した。

日本における環境や景観に対する意識の変化や、住民運動の変遷は文献調査に基づく。

## <先行研究の提示>

環境、公害、景観といった視点から開発を検証・あるいは反対する研究は存在する。

環境の視点から：守屋（1972）

公害の視点から：佐久間（1984、2002）、宇井（1971）

景観の視点から：岡田（2000）、渡辺（2004）

各地の開発に対して、自然環境の破壊、公害・健康被害、景観の変容というアプローチから研究がなされた事例はいままでにもあった。しかし、私が知りたいのは、開発が行われる地域の人々が開発をどのように受け止め、対応してきたかである。残念ながらこのような研究はないに等しい。

反対運動が起きた地域の研究や、運動を行った人々自身による運動の記録などは残されている<sup>3</sup>。しかし、私が最初に問題意識を抱いた秩父武甲山の開発では目立った反対運動が起きなかった。なぜ起きなかったのか。起こせなかったのか、それとも単なる住民の怠慢だったのか。このような視点から切り込んだ研究はまだない。

### ・景観からのアプローチ

武甲山の景観の変遷をたどった研究に、岡田昌彰による「秩父武甲山の景観変容とイメージ変遷に関する研究」という論文がある。ここでは武甲山を景観として扱い、それに対する地元住民の人々の意識を調査している。武甲山をテーマにした小中学生の作文コンテ

---

<sup>3</sup> 中村紀一編、『住民運動“私”論』（創土社、2005（学陽書房、1976の復刻版））、木村万平、『京都破壊に抗してー市民運動20年の軌跡ー』（かもがわ出版、2007）石原一子、『景観にかける』（新評論、2007）など。

スト(4)を対象とした研究で、無残な姿になってしまった武甲山に対する子供たちの素朴な気持ちが分析されており興味深い。しかし、秩父における武甲山は単なる景観ではなく、文化の中心であり、日々の生活の一部であった。また、調査対象が小中学生の作文コンテストの優秀作品のみということで、限られた年齢層の限られた条件の下での意見である。以上の理由から、より調査を行う余地はある。

また、住民運動と景観をからめた研究に、渡辺による『「生活景観」に関する住民運動について』がある。この研究では、「生活景観」を「日常の生活で接する、身近な・些細な景観」と定義づけをし、奇抜な色のマンションやショッピングセンターの外装などに対して住民がいかに関心したかを分析している。戦後の日本社会において、「生活景観」に対する意識がどう変わってきたかなど興味深く、また本研究の参考になる点もあった。しかし、「些細な」「生活景観」に絞っている点や、そもそも住民運動が起きた事例を対象としている点が私の問題意識とは異なる。

#### ・自然環境からのアプローチ

環境破壊の問題として武甲山の問題を取り上げる書物は多い<sup>(5)</sup>。石灰岩の山である武甲山には、その環境固有の動植物が生息する<sup>(6)</sup>。開発が進むことによってそれらの環境が変わってしまう危険性があり、それを危惧する専門家によるものだ。しかし、これらはあくまで自然環境と言う側面から切り込んだものであり、周辺住民の意識などは言及されていない。

#### ・公害からのアプローチ

千葉県君津市を中心とする、千葉の山々における開発を批判的にとりあげた研究が佐久間充によって行われている。佐久間は、保険社会学が専攻であるとプロフィールにも書いてあるが、開発を通じて地元住民に健康被害が出たという点からこの問題に取り掛かっている。アプローチこそ私と異なるものの、著書『ああダンプ街道』(1984)では開発の状況や、被害の実態を調べると共に、開発の進む地域の住民やダンプカー運転手へのインタビュー調査を行っている。『山が消えた 残土・産廃戦争』(2002)はその続編であり、前作からの経過をまとめてある。これらの著書は私の研究を進めるにあたっても参考になった。また、公害の研究においては、1970年に東京大学において公害をテーマにした自主講座を行

---

4 武甲山の自然や、景観に関して多様な著書を残し、戦後の開発期の秩父における自然保護運動のキーパーソンでもあった清水武甲らが中心となって作った武甲山植物群保護対策推進協議会によって行われている。1970年から毎年実施されている。

5 守屋忠之、「秩父武甲山石灰岩特殊植物群落の現状」(『遺伝』26巻6号、1972)など。

また、1975年に行われた武甲山総合調査においても、調査の中心は開発の影響でその存続が危ぶまれた石灰岩特有の自然環境を記録し、後世に伝えることであった。総合調査を受けて設立された横瀬町歴史民族博物館もまた、自然環境の展示が大部分を占めている。

6 特に植物は1951年に「武甲山石灰岩特殊植物群落」として国の天然記念物に指定されている。



った宇井純などがいる。

武甲山では、開発過程において目立った健康被害・公害がなく、このようなアプローチからの研究はなかった。

### <研究の意義と限界>

私は旅行でたまたま秩父を訪れ、武甲山の姿を目の当たりにして衝撃を受けた。「長年人々の生活の中心であった山をこのような姿にしてしまうとは信じられない」、というのが素直な感想だった。しかし、それはあくまで「外」の人の視点である。地元の人々にとっては自分達の住む土地がいかに発展していくかという問題も絡んでくるため、複雑だっただろう。

上でも述べたように、反対運動が起こらなかった地域の考察というものは今までなされていない。また、武甲山の開発を軸に秩父の歴史を追った研究もない。秩父の事例を他の時代・地域の開発とそれに対する住民の対応と比較することによって、武甲山の事例を相対化して歴史的に位置づけることは、個別事例の研究としてのみならず、近代日本の開発をめぐる環境の変化を見る上で意義がある。

研究の限界としては、聞き取りを行う対象の数が限られてしまうため、秩父や高尾の人々の声の全体を反映しているとは言えない点が挙げられる。また、本論中にも言及するが、そもそも高尾山を武甲山の比較対象にすること自体に無理がある。しかし、比較するに当たって完璧な事例を見つけることは困難であり、また聞き取り調査を行う以上地理的な制限が加えられてしまうので、今回はこのような研究となった。

### <本論の構成>

1章は、「開発に伴う武甲山の景観の変容に対して、秩父の住民はどのような反応をしたのか」という研究を始めた当初の問題意識にそって展開される。1-1, 1-2では秩父の文化・風土や開発の歴史などを一通りまとめ、1-3のインタビューへとつなげる。そして、1-1から1-3までの内容を受けて、1-4では「なぜ秩父では反対運動が起こらなかったのか」という問いに対して仮説を立てる。

2章では、1-4で立てた仮説を検証する。2-2, 2-3では高尾山を比較対象として深く掘り下げるが、その前に2-1において他の開発事例も挙げながら、高尾山を比較対象に選ぶまでの過程を紹介する。

最後に結論において、武甲山の特殊性を明らかにすると共に、よりマクロな視点から開発に対する住民の反応が時代を経てどのように変化してきたかをまとめる。

## 本論

### 第1章. 武甲山の開発



<写真2>1958年（昭和33年）頃の武甲山の姿。開発が最盛期を向かえる前で、西側の影森地区（写真の右端）で採掘の様子が見て取れるものの、頂上はほぼ無傷であり過去の雄大な姿の面影が残る。（横瀬歴史民俗資料館、『武甲山百景』5頁より）

#### [1-1. 秩父における武甲山]

仮に、富士山に開発の計画が上がったとした、多くの日本国民は反対の声を上げるであろう。それは、富士山が日本一標高の高い山というだけでなく、その容姿の美しさから古くから眺める対象であり、日本のシンボルだったからである。今は観光名所としての性格が強いが、信仰の対象でもある。八合目以上の一帯は富士信仰の中心である浅間大社の境内で、民間企業が土地利用できないようになっている。

それでは、武甲山とは秩父の人々にとってどのような存在なのだろうか。開発が容認されるような性格を持っていたのだろうか。武甲山の問題を取り上げる前提として、ここではまず武甲山の基本的な情報を紹介する。これらの事を知ることによって地元の人々にとって武甲山を開発する事がどのような意味を持つかという事が理解できる。

### 1-1-1. 武甲山という山



<図1> 秩父市外地と武甲山の位置関係 (Yahoo!地図情報より)

まず武甲山の基本情報を説明する。

武甲山は秩父盆地の南端、現在の横瀬町に位置する独立峰である<sup>(7)</sup>。都心から直線距離で50km程度と、決して遠くはない。山の標高はもともと1336mあり、東西に約5kmのびる。最も、1979年に石灰岩採掘のために頂上を40mほど削ったため、その後1295mになった<sup>(8)</sup>。石灰岩は、秩父市街地から見て正面にあたる山の北側一体に厚さ400~600m程ではりついており、頂上から地下に至るまで続いている。

秩父地域一帯は、地元のカメラマンであった清水武甲らの働きかけにより、東京都の多摩地区などと合わせる形で1950年に国立公園に指定された<sup>(9)</sup>。また、石灰岩の山という事で、武甲山には他では見ることのできない植物が生えている。チチブイワザクラや、ミヤマスカシユリなどは1951年に「武甲山石灰岩特殊植物群落」として、国の天然記念物にも指定されている。中には全国でここでしか確認されていない貴重な植物もあり、石灰岩を削り取る事により、これらの植物への影響が懸念される。

首都圏に近い場所に位置し膨大な量の石灰岩があることにより開発的になりえた事、また石灰岩の山ならではの特殊な環境が生まれた事が理解できよう。

<sup>7</sup> 山は東西に長く伸びており、頂上のある東側は横瀬町に入るが、西側のいったいは秩父市にも入る。

<sup>8</sup> 数年後に計りなおした結果1304mに訂正された。

<sup>9</sup> 2000年に名称が改められ、秩父多摩甲斐国立公園となった。

### 1-1-2. 生活の一部としての武甲山

次に、秩父の人々の日常生活における武甲山がいかなるものだったかを説明する。

武甲山の標高は頂上が削られる前の段階でも 1336m と決して際立って高いわけではない。しかし、秩父盆地は周囲を秩父山地に囲まれている狭まれた土地であり、その中で独立峰としてそびえ立つ武甲山は大変目に付く。そのため、「武甲山が秩父の象徴であることは…なんの説明も要らないことである」<sup>(10)</sup>。

山の資源を用いて生計を立てる事は、石灰岩の採掘が活発化する前から行われていた。武甲山や周辺山々では銅や石灰岩がとれるということは地元の人々の間では知れ渡っており、細々ながら採掘が行われていた。山から材木を取ったり、それを炭にして売ったりという事も行われていた。

農家の人など、直接山を利用する職種でない人にとっても武甲山の存在感は大きかった。「武甲山の右側からくる雲は、決して雨を降らす事はない。でも、左側から迫ってくる雲は、どれだけ晴れていても雨を降らす」、と横瀬町にて稲作を行う中氏は言う<sup>(11)</sup>。「山は生活のバロメーターであって、山を無視した生活はありえないの」だ<sup>(12)</sup>。天候の優れない年には農家としてやるべき処置を終えてから、「後は神頼みという事で、武甲山に願ひする」<sup>(13)</sup>。

武甲山が生活に密着した存在であったことが見て取れる。そして、開発が本格化する以前から地元の人々の間では資源が豊富な山であることが認識されており、石灰岩や木材の調達が行われていたことは注目に値する。次に示すように、武甲山は信仰の対象であったが、ただ拝むだけの山ではなく、生活のために利用し得る山でもあったのだ。

### 1-1-3. 信仰

最後に、信仰の対象としての武甲山を紹介する。

「太古の時代から山麓の人たちに神奈備山として、山そのものが神体であると信仰されて来た山もあると思います。武甲山はその神奈備山なのです」<sup>(14)</sup>、との記述があるとおろ武甲山は単なる生活の一部に留まらず、山岳信仰の対象であった。秩父は信仰深い地域であり、各村や地域にそれぞれ独自の祭りがあるほどだ。その中、秩父盆地全体に点々と

---

10 千嶋壽、『秩父大祭』(埼玉新聞社、1981) 60 頁

11 NHK、「小さな旅武甲山みつめて～埼玉県横瀬町～」(2006 年 5 月 29 日放送)

12 清水武甲、『秩父I 風土考』(言叢社、1983) 103 頁

13 NHK、前掲放送における農家中氏の発言。

14 清水武甲、『秩父II 山と生活』(言叢社、1983) 84 頁

存立するのが秩父三十四ヶ所の札所（観音霊場）である。今でも観光客が回りに来る秩父の名物のひとつであるこれらの札所も武甲山信仰がもととなってできた。その証拠に、全ての札所が武甲山を望む事ができる位置に建設されている。

また、秩父の一大行事である秩父夜祭（<sup>15</sup>）も、秩父神社に宿る女の神と、武甲山に宿る男の神が年に一度だけ会うことが出来るという伝説に由来して行われる。秩父市街地の中心にある秩父神社が武甲山の方向を向いている事からも、武甲山が地域の信仰において欠かせない存在であることは明らかだ。さらに三峰神社、両神山麓という「秩父を代表する2つの霊地」からも武甲山を拝む事ができる。それらの霊地が武甲山と何らかの関係があったことも推測されている（<sup>16</sup>）。

以上より、武甲山が古くから山岳信仰・民間信仰の対象であったことが見て取れる。

武甲山は独立峰として、秩父の広い地域から眺める事ができ、日常生活・信仰両方の面において秩父の中心であると言える。眺める事ができない場所から、視界に入る場所へ嫁いだ人はそれだけで喜んだという話もあったらしい（<sup>17</sup>）。地元住民にとって愛着のある山であったことがうかがえる。以下では、その武甲山の開発の過程を追う。

## [1-2. 開発の歴史]

武甲山の開発には、数多くの企業が携わってきた。中でも株式会社である秩父セメントは古くから開発を進める地元出身の企業で、開発の歴史においても中心的存在である。ここでは、その秩父セメントを中心に現在まで至る武甲山の開発の歴史を紹介する。

### 1-2-1. 秩父セメント以前

まずは秩父セメントが出来る以前の状況を説明する。

武甲山における石灰岩の存在は、江戸時代にすでに知られていた。明治から大正初期にかけて、幾人かの人々が個人的に採掘を行おうとした記録や形跡があるのだ。しかし、「無尽蔵と言われた埋蔵量を誇りながらも個人による経営による企業には限度が」あった（<sup>18</sup>）。

---

<sup>15</sup> 国の重要無形民俗文化財に指定されている。京都の祇園祭り、飛騨の高山祭りと合わせて、日本の三大曳山祭りに数えられる。毎年12月2日3日に行われる。

<sup>16</sup> 清水武甲、『秩父I 風土考』（言叢社、1983）127頁

<sup>17</sup> 6月7日の御嶽神社神主に対するインタビューより。

<sup>18</sup> 小池、「武甲山における石灰岩の開発」（秩父市教育研究所、『秩父教育 第50号特集 武甲山』、1970）20頁

結局、大正4年に上武鉄道（後の秩父鉄道<sup>19</sup>）の取締役が武甲山の西端の上影森共有林にて採掘を始めたのが、大資本による初の開発だった。開発を契機に上武鉄道は延長され、大宮町と影森村を繋ぐまでになった。開発が進められた影森地域<sup>20</sup>はそれまで「全くの寒村」にすぎず、『嫁に行くなら影森およし 水がないのに米がない』といわれていた。それが、開発が進められると同時に『嫁に行くなら影森おいで 石の中から金が出る』と言われるようになったという<sup>21</sup>。

「金が出る石」とも言われた石灰岩の需要は以後ますます増えていく。以下では秩父セメントの発展にそって、開発の歴史の紹介を続ける。

### 1-2-2. 秩父セメント株式会社

ここでは秩父セメントの発展の経緯を紹介する。

秩父セメント株式会社は大正12年に諸井恒平（1862～1941）を取締役社長、渋沢栄一（1840～1931）を後援者として始まった会社である。諸井家と渋沢家はそれ以前から交流があり、諸井恒平は渋沢栄一の従兄妹である。両氏共に、秩父でこそないものの埼玉県出身だ（諸井は本庄、渋沢は血洗島）。

渋沢栄一は、「地方産業の繁栄こそ日本の発展を支える」という考えにもとづき、特に出身地の埼玉県には様々な事業を持ち込んだ。「県下の産業経済の発展をうながし、ひいては県民の福祉に大いに貢献」することになった武州銀行（後に合併して埼玉銀行になる）も彼の援助指導によってできた<sup>22</sup>。その渋沢が、22歳年下の諸井を起用し始めたのは、東京駅や慶應義塾図書館などの建設のための煉瓦を製造した日本煉瓦製造株式会社の建て直しの時（明治20年）からである。その後、諸井は日本煉瓦の社長を務めるが、「明治40年代の初めのころ、煉瓦の時代からセメントの時代に移りつつあることを既に痛感して」おり、セメント事業への進出を決意したのだという<sup>23</sup>。

同郷の資本家によって進められた、地元活性化事業という性格があったことが、地元住民に受け入れられやすかった理由の一つである。

### 1-2-3. 現在のセメント業

---

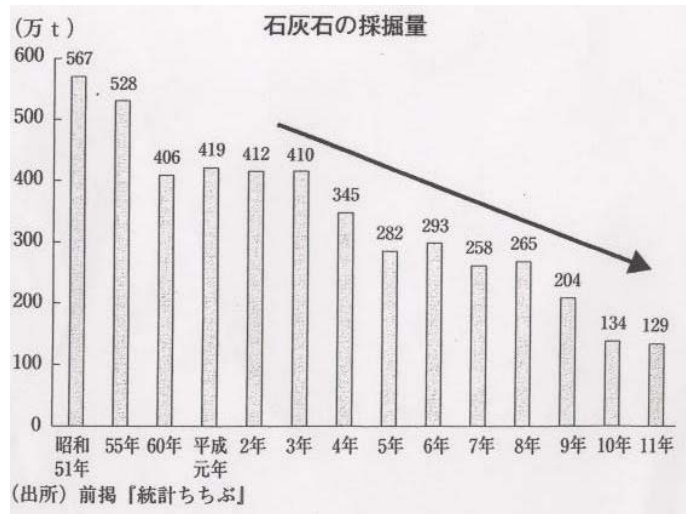
<sup>19</sup> 秩父には鉄道が2つ通っている。南北に走る秩父鉄道と東西に走る西武鉄道だ。秩父鉄道は北の熊谷方面へ、西武鉄道は東の池袋方面へ延びている。

<sup>20</sup> 東西に伸びる武甲山の最西端（秩父市街から見て右端）の一体の地域。山のメイン部分ともいえる標高の高い一体がある東側とは異なり、標高が低い状態が続く。

<sup>21</sup> 小池、同上書、20頁

<sup>22</sup> 蕪塚一三郎・金子吉衛、『埼玉の先人 渋沢栄一』（さきたま出版会、1983）175～182頁

<sup>23</sup> 蕪塚一三郎・金子吉衛、同上書、195頁



<図 2>昭和 51 年（1976 年）以降の武甲山の石灰石採掘量の変遷。（久喜、『秩父 環境の里宣言』91 頁より）

最後に、現在のセメント業のありようを紹介する。

秩父セメントをはじめ、日本セメントや三菱セメントなど多くの企業が日本の高度発展期に合わせて開発を推し進めた。採掘量も昭和 40 年代後半まで増加の一途をたどることになる。しかし、オイルショック（1973 年）の影響で勢いが鈍ってからはその量は徐々に落ち込んでいき、現在はピークの時期に比べると採掘量は五分の一程度だ<sup>(24)</sup>。秩父セメントも、保持していた二つの主要工場のうち秩父市内にある第一工場は閉鎖されてしまった。それでも今までに武甲山から取り出された石灰岩は合計約 4 万トンにも上るといわれている。

他の企業の進出にも影響され、秩父セメントは 1994 年に合併する。2 度の合併の末、現在は太平洋セメントの一部となり、秩父セメントの名前はもうない。その太平洋セメントや三菱セメント（三菱マテリアル）など、現在は 5 社が採掘権を保持する。三菱のように横瀬町に工場を構える企業もあれば、太平洋セメントのように削り取った石灰岩を 20 数キロのベルトコンベアに乗せて日高まで送ってから加工する企業もある。

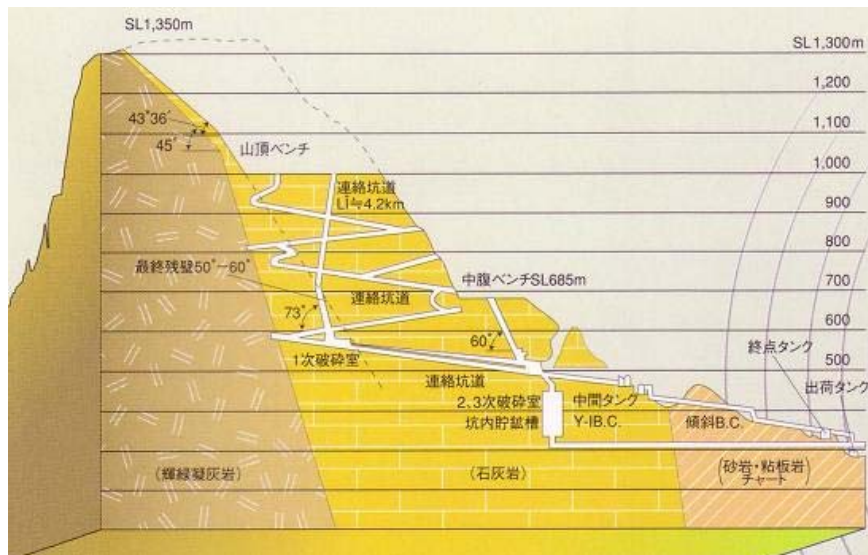
秩父セメントが出来た当初は山麓で火薬を爆発させ、岩が砕けて下に落ちたものを採掘するという方法をとっていた。しかし、それでは効率が悪くまた死亡事故なども起こったため、昭和 43 年（1968 年）前後を契機に安全かつ効率的な、ベンチカット方式<sup>(25)</sup>が用いられるようになる。そのため山の上部の採掘が進み、1975 年には山の最も聖なる場所と

<sup>24</sup> 最も、最近では採掘しやすく、また首都圏に運送しやすい武甲山の石灰岩はとっておき、群馬県などでの採掘に力を入れる企業もいるようである。

<sup>25</sup> ベンチと呼ばれる水平面の表面を、厚さ 10m ごとにはぎ取るように水平に削っていく方法。



も言われる山頂にある御嶽神社の社地を 50mおろし、頂上を削り取る事になった。



<図 3> 武甲山の断面図。防音のため、石灰岩を砕く作業が山内部のトンネル内で行われている。また、ベンチカット方式に変更されたことから、頂上ベンチの部分が平らになっている様子が分かる。(秩父石灰工業株式会社ホームページより)

採掘による騒音や、爆発によって巻き上がる煙なども、図 3 のように作業を山の中で行うなどの工夫により以前に比べて緩和されてきている。まず、岩の中にあけた穴に火薬を入れて爆発させるベンチカット方式に変わった事により、直接火薬を爆発させていた頃のように秩父の盆地中に響き渡る程の音は出なくなった。また岩を砕く作業も、山の中に組み込んだ機械によって行うようになり、外にまで響く事はない。現在採掘が最も盛んに行われている山の上部はベンチカット方式をしやすいするために平らになっており、その水平面が徐々に低くなってきているのだが、山の淵の部分は塀のように少し高く残しており、音や煙が外へ行く事を防ぐ役割を果たしている。過去には爆発によって巻き上がった煙が原因とされる健康被害が、わずかではあるが起きた事もあり<sup>26)</sup>、それらに対する対策だろう。

石灰岩は、コンクリートやセメントのみならず車の部品、歯磨き粉やこんにやく・チョコレートのような食べ物など誰もが日常的に用いるものにまで使われている。全国民にとっての生活必需品であり、石灰岩の採掘によって国民の生活が保たれている。そして、秩父の人々にとっては石灰岩の採掘が戦後の地元経済を支えてきたという側面もある。ただ、

<sup>26)</sup> 秩父市市民環境部・環境衛生課公害係編集・発行、『秩父市の環境』(2003)より



その開発を行う対象が地元民にとっての「神様」、武甲山だったのだ。

#### 1-2-4. セメント業と2つの資料館

秩父におけるセメント業者は、秩父セメント（現在は太平洋セメント）など地元出身の企業が中心となって、周辺住民とのコミュニケーションをとるなど配慮をしている部分が見受けられる。秩父市の武甲山資料館と、横瀬町の歴史民俗資料館の設立などはその良い例であろう。

武甲山資料館は芝桜でも有名な羊が丘公園にある。武甲山が秩父市と横瀬町にまたがるため、資料館もその両自治体の境に近い場所に建った。ここでは、石灰岩に育つ特殊な植物群や武甲山に生息する動物の剥製が展示されるなど、武甲山の自然を紹介している。同時に石灰岩がどのように採取されているか、また採取された後にどのように用いられているかなどが分かるようになっている。実はこの資料館、建物から中身まで全て武甲山で活動するセメント会社4社による共同出資によって出来たのだ。

1970年代に入り、武甲山の姿の変容が顕著に現れるようになったことをきっかけに、清水武甲率いる自然保護団体などがセメント業者や自治体（秩父市と当時の横瀬村）に呼びかけを行った。その結果、1974年以降「武甲山資料保存会」が設立し、幾度か話し合いの場を持つようになる。1975年に武甲山の山頂にあった御嶽神社を下ろす際にもここで話し合いが持たれ、セメント会社が移設費3000万円を全額出す事が決まった。武甲山資料館も同じ経緯を経て、1979年11月に開館した。現在は秩父市が管理を行っている。

武甲山の開発により秩父市以上に多額の恩恵を受けている横瀬町は、1977年から3年をかけて武甲山総合調査を行った。ここでは、動植物、地質、気候などあらゆる調査を行った。総合調査の成果を保存・展示するために設立されたのが横瀬町歴史民俗資料館である。建設の趣旨には「(秩父の人の)自然に順応した生活も近代産業の発達とともに少しずつ変化し、戦後の急激な社会変動により生活環境が一変して、郷土の歴史・民俗等の文化遺産が散逸し、失われつつある状況」を目の当たりにし、現在あるものだけでも記録しておく事にした、とある。

セメント会社にせよ、横瀬町にせよ、地元の神様を削ってまで利益を得た事に対する一種のやましさがあったのではないか。せめてもの責任を取るためにこのような資料館や調査を行ったように見える。太平洋セメントは現在セメント業界で国内シェア4割以上を誇り、海外進出も遂げている大企業だ。また、セメントのみならず国内外で他の資源開発にも乗り出している。このように地球環境を「食べ物」にしている企業だが、現在は廃材を原料に混ぜてセメントを作るリサイクルなどを行い、それらをアピールする事で環境への配慮が行き届いている企業としてのイメージ作りに力を入れている。ここでも地球に対する償いの意識が働いたのであろうか。

### 1-2-5. 秩父における他の産業

秩父地域は、もともと米の収穫が少ない地域だった。『秩父市誌』によると、江戸時代の現秩父市街地周辺では畑の面積が田の7倍であるとのデータもある。現在も秩父を歩くと、田んぼはほとんど見受けられない。横瀬町には棚田が広がる一帯があるが、これも都市部の子供に農村体験をしてもらう、観光のためという側面が大きい。山間部に位置するという地理的条件の影響が大きい、米を主要産業にする地域が多かった日本の地方において、これは珍しい例といえる。

このような条件のもと、秩父ではどのような産業がいかに発達したのか。またその中でセメント業の位置づけとはいかなるものか。ここで検証する。

#### <絹産業>

秩父地域において絹は、紙や綿布とともに、江戸時代の初期から生産が始まった。とはいえ、始めは農業が産業の母体であり、絹の生産は副業という形でそれぞれの農家が個別に生産していた。この形態は明治の初期まで続き、「明治三年の大宮郷（現在の秩父市街地。筆者注）の戸籍調書によってみるも、その主業は殆んど農家であって、商工業者は、おおむね兼業であるように記されている」（<sup>27</sup>）。また、後には絹製品の生産も行うようになるが、この頃は主に絹糸であった。

需要が広がり、絹を主産業とする家が増えたのは、交通網が整備されてからのことである。明治十年代に開通された秩父新道開通と、大正4年に運行が開始された熊谷、秩父間を結ぶ上武鉄道（秩父鉄道）は、それまで山間部に位置する盆地として、外界との流通が不便だった秩父地域の産業の勃興に大きく寄与した。また、明治維新後の「政府による『殖産興業』のスローガンは、その発展を促進するのに役立った。山村秩父においても、農業、林業はもちろん、製糸、蚕種、絹織物業などの、飛躍的展開が見られるに至」った（<sup>28</sup>）。

途中、秩父事件（<sup>29</sup>）などで混乱が生じたものの、その後も絹産業は戦後まで秩父の主

---

<sup>27</sup> 秩父市誌編纂委員会、『秩父市誌』（埼玉県秩父市、1962）826頁

<sup>28</sup> 同上書、540頁

<sup>29</sup> 秩父事件：明治14年（1881年）、西南戦争にともった不換紙幣の増発が原因で、激しいインフレーションがおきた。大蔵卿の松方正義は、その対策としてデフレ政策をしいたが、そのため米や生糸の価格が崩れ、農村部は大打撃を受けた。秩父も例に漏れず、それに不満を抱いた農民が、全国的に広がりを見せていた自由民権運動の波にのって秩父困民党を結成し、起こした暴動が秩父事件（1884年）である。群馬や長野にまで広がりを見せ、参加者は4000人を超えるまでに至ったが、中央政府の派遣した軍隊や警察の前になす術がなく、多くが捕えられた。

産業の一つとして君臨し続ける。絹織物を扱う家は「機屋＝はたや」と呼ばれ、秩父の人と話していると、「あの家も昔は大きな機屋だった」などと、今でも日常会話でその単語が出てくる。

絹産業が衰退を迎えるのは、戦後の昭和 40 年代（1965～75 年）だ。昭和 30 年代にすでに伸び率は弱まっていたものの、高度経済成長の波にのり、生産額はかろうじて増加していた。しかし、その後は化学繊維に押される形で衰退の一途をたどり、機屋も電子機器メーカーなどに転換していった。

今では観光客目当ての産品として売られているに留まる。

### <観光業>

秩父の観光の中心は羊山公園の芝桜と、秩父夜祭である。秩父夜祭は、京都の祇園祭、飛騨の高山祭りと並んで日本の三大曳山祭りに数えられる伝統ある祭りで、毎年 12 月の 2 日と 3 日に行われる。例年、20 万人程度が訪れる秩父の一大イベントだ。2006 年は週末に重なったため、29 万人が集まり大盛況だった。一方、今や秩父の代名詞にもなりつつある羊山公園の芝桜だが、2000 年に始まったばかりと歴史はまだ浅い。それでも初年度は、ゴールデンウィークの連休に 63 万人を超える観光客が訪れるなど、集客力は強く、2007 年からは芝桜の季節だけ入園料を取るようになった。

他にも、江戸時代から巡礼に訪れる人々で賑わったという秩父七湯<sup>30</sup>や、34 ヲ所の札所を目的に毎年一定数の観光客が訪れる。また、最近になって農園や、棚田で農業体験を行う農家や、エコツアーの企画を始めた人もいるが、いずれも手探り状態である。

芝桜も、夜祭も集客力はあるが、それはどちらも秩父が地理的に首都圏から近く、手軽に行けることが後押しした結果である。そして、それは同時に日帰り客が多いことも意味する。現在の秩父地域における観光業の課題は、宿泊客率を上げることにある。

以上で、セメント業以外の秩父の産業を見てきた。米が取れない秩父において、絹産業が長年産業の中心であり続けた。しかし、それも海外からの安価な繊維との競争に敗れ現在では地域を支えるほどの生産量を誇っていない。そして、絹産業に変わる新たな産業も、2000 年に羊山公園の芝桜が出来るまで現れなかった。

武甲山におけるセメント開発も、1973 年のオイルショック後、勢いは落ちた。にもかかわらず、1975 年に御嶽神社の社地を降ろす決断をしてまでも採掘を続けたのは、他に地域を支える産業がなかったことも影響しているのではないか。

### [1-3. インタビュー]

---

<sup>30</sup> その後 3 つが枯れてしまい、現在は 4 つのみが残る。

繰り返しになるが武甲山は、地元の人々の生活の一部であり信仰の対象であった（1-1）と同時に、日本の戦後の発展と秩父の地元経済の両方を支えることの出来る石灰岩を含んでいた（1-2）。私は秩父出身ではないし、武甲山も現在の痛々しい姿しか知らない。開発が本格化してから、山がだんだんと崩されていった当時を生き残った人々は、武甲山に対してどのような思いを抱いていたのだろうか。私が本論文を書き始めるにいたったこの疑問を解決するため、実際に当時を知る人々に話しを聞いた。秩父出身のジャーナリスト（現在は東京都在住）、武甲山御嶽神社の現在の神主、武甲山の開発に異を唱えた代表的論者である清水武甲の息子、セメント業に携わった後武甲山を日々とり続けたアマチュアカメラマンの4人にインタビューを行った。それぞれ、全く違う立場から武甲山に関わってきた人物であり、それぞれの見解ももちろん異なった。以下がインタビューの内容である。

### 1-3-1. 秩父出身のジャーナリストへのインタビュー（2006年5月）

このジャーナリストは団塊の世代で、高校卒業までの間秩父に住んでいた。秩父出身とはいえ、秩父市街地から少し北に位置する長瀨地域出身という事で、直接武甲山が見える位置ではなかった。また、実家も機屋であったこともあり、さほど武甲山が生活に影響を与えたと言う事はなかった。しかし、秩父文化圏出身という事で秩父の人々の価値観や武甲山への思い入れなどを聞いた。

まず聞いたのは武甲山があのような姿になってしまったことに対して、地元の人々がどう感じているかという事だ。「嘆いているということはない。昔から秩父の人は山に入り、材木をとったり、それを使って炭を作ったりして生計を立てていた。銅や石灰岩の採掘も行われており、山を使うことは珍しい事ではなかった」。諸井氏、渋沢氏など埼玉県出身の人が事業を始めた事も反対を招かなかった要因とも語ってくれた。「もともと秩父には敬語がほとんどない。上下関係などがあまりなく、皆で一緒に頑張るといった風潮があった。起業した諸井一族なども地元民と親しみがあり、傲慢な地元のボス的な存在ではない。外から大資本が入っていきなり事業を始めたら反応は違っていた」。

セメント業が秩父で行われる事によって鉄道がひかれ、職も増えることになる。それらのこともあり、地元の人々はセメント業を受け入れた。やはり明治17年の秩父困民党による秩父事件などが起きた土地でもあり、人々が貧しかったため受け入れやすかったのだろうか。それも聞いてみたが、「そうではない」という。「困民党という名前のため、もの凄く貧しい、乞食のようなイメージをもつだろうが、そうではない。実際には住民は皆一定の土地を保持しており、また（上記のように生活を支える）山もあったため生活に苦勞をする地域ではなかった。織物業も盛んだった。むしろ、皆が一定の収入があり、貨幣経済

が成り立っていたからこそ松方財政のデフレ<sup>(31)</sup>の影響をもろに受けることになり、それに反発する形で困民党が生まれた」のだという。

清水武甲のように開発に反対する内容の著作を残している人に対するの见解も伺った。「その様な人もいたかもしれないけど多数ではなかったのではないか。開発が進み、武甲山の見た目も大幅に変わってしまった今になるとむしろそれらの人々の方が目立つ。しかし、開発反対運動のようなものは秩父において起きた事はない。開発を通して地元は恩恵を受ける訳だし、堤防が出来る事によって、生活の手段を奪われた漁師が必死になって反対するのは異なる」。とはいえ、たまに秩父に戻る時に武甲山を眺めると「ああ、こんな姿になっちゃったんだな」と感じるという。

以上のように、秩父の人々にとっての武甲山とは確かに生活に溶け込んだ存在であった。しかし、同郷の人によって開発が行われた事もあり、その姿の変容はさほど反発を呼ぶものではなかったようだ。

### 1-3-2. 御嶽神社の神主へのインタビュー（2006年6月）

既に上で述べた事であるが、武甲山御嶽神社は武甲山の開発に伴い 1975 年に社地を約 50m 低い別の場所に移している。山の頂上は元来聖なる場所として崇められており、そこを削り取ってしまう事に対し、神主として思うところがあったはずである。開発全体に関してどのように関わってきたのかという点とともに話を聞いた。

武甲山御嶽神社の神主も、普段は山頂の神社にはおらず、横瀬駅<sup>(32)</sup>から 20 分ほど歩いたところにある里宮に身を置く。80 歳になる神主は、現在では例大祭（10 月 1 日）、祈年祭（4 月 15 日）、山開き（5 月 1 日）と年に 3 度ある行事のうち祈年祭と山開きの 2 回しか頂上には行かないという<sup>(33)</sup>。後は横瀬祭など地域のお祭りに出張をしているのだそうだ。

まずは山の開発の進められ方について聞いた。「うちの家系が代々山を管理していた時代

<sup>31</sup> 大蔵卿の前任者であった大久保利通時代、日本はインフレが続いており「農民層には経済的余裕を、“無産”士族・都市貧民には生活難をもたらした」（牧原、2007）61 頁。また貿易赤字も増えていった。松方はこれをよしとせず、就任と同時にデフレ政策をひいた。その結果、今度は富農や貨幣経済が成り立っていた地方が貧困に苦しむことになる。

<sup>32</sup> 西武線で秩父に行く際、終点が西武秩父駅で秩父市の中心に最も近い駅である。横瀬駅はその一つ手前の駅で、西武秩父駅からは直線距離にして 1.5km 程離れている。武甲山の大部分は横瀬町に属するものである事は本文中でも述べたが、横瀬駅から見える武甲山はとても近く大きい。武甲山へのハイキング客も横瀬駅で降りていく人が多いらしい。三菱マテリアルの大きな工場や、砕いた石灰岩の集積場も線路沿い（東京から向かって横瀬駅の手前）にある。

<sup>33</sup> NHKの「小さな旅」（5 月 29 日）では山頂の神社にいる姿が放送されていたが、ちょうど 5 月 1 日の山開きのため登っていたときだったのだ。

もあったようだ。でも、肝心の開発が本格化し始めた時期はちょうどちの家系が途切れていた時で、他の家が神主をやっていたから具体的な経過はよく分からない。現在では横瀬にある武甲山森林組合（横瀬住民によって構成される）によって管理されており、開発業者とはそこが契約をしている」のだという。そして、現在は5社によって開発が進められているが、それぞれから開発の「お礼」が横瀬町に入る。それが横瀬の財産である。平成の大合併が進む中、秩父市（埼玉県の面積の15%にまで膨れ上がった）と合併をしない理由もここにあるという。「(合併を)しない方が良いと思う人が多いからしない。最近も町の住民で投票をしたけど、7対3くらいで合併しないと考える方が多かった。武甲山があれば合併は必要ないだろう」との見解だ。町への「お礼」とは別個に山の土地の所有権として株が300用意されており、1株あたり年に100万円が支払われるらしい。株は町の住民が分けてもっているとのことである。

1975年に開発のために社地を譲った事に対しては「止むを得ない」という。始めのうしろ開発は山の下部から行われたが、危険が伴ったのと、効率が悪いので山の上部から段々と下へ下がっていく方法へ切り替えた。また「下からだ」と、さすがに目に付きやすく住民もびっくりしてしまうから、景観的にも上から削る事にした」という理由もあるらしい。いずれにせよ、上から削る方が都合良いという事になり、町の利益を考え「止むを得ない」と思ったらしい。ちなみに、上から開発が進むという事で「今は山の中に車が通れるトンネルが空いている。らせん状になっており、車に乗ると頂上まで行ける。私も最近は上に用事があるときには三菱さんに頼んで乗せてってもらおう」<sup>(34)</sup>のだそうだ。開発業者との友好関係が見受けられる。

清水武甲のような、開発反対を唱える人もいるがという質問に対しては「いても少数派だろう。地元には仕事が増えるわけだし、鉄道が引かれて産業も発展する。皆やはり生活を優先したのだらう」。地元産業として多くの住民が携わり、またそれによって特に利益を得た横瀬町の人なら当然の意見かもしれない。

最後に、山岳信仰が盛んな秩父において、その中心とも言える武甲山が削られていく事に関して、どう思うかをたずねた。「御嶽とは一番高い山の意味。武甲山は秩父の御嶽山である。古くから先祖も祭られると考えられており、また神仏混合の時代には三十四の札所も武甲山を拝める位置に作られるなど秩父の山岳信仰において大きな役割を果たした。その武甲山が削られる事に関して私は普段『神が身を削って恵を下さっている』と説明している。もともとは『神=山』であったかもしれないが、今は『山が変わっても神は続く』と捉える。人間は勝手なもので、自分勝手に都合のよいように解釈してしまう」。最後の文は、武甲山の開発に限らず、開発全般に対して言える。

話を聞いている最中に、毎日12時半に鳴るといふ発破の音<sup>(35)</sup>が聞こえた。

<sup>34</sup> <図3>を参照。

<sup>35</sup> 発破の音は、山の麓に火薬を仕掛けて崩していた頃に比べ、頂上から崩すようになったことにより以前より響かなくなった。しかし、武甲山に近い横瀬町の一部では依然として聞こえる。

当初の仮説とは反対に、御嶽神社の神主も開発に理解を示している事がわかった。武甲山の開発による恩恵をもっとも受けている横瀬町の住民という事もあるのだろう。しかし、「人間は勝手なもの」と自ら認めているように、神様を削ってしまった事に対しては複雑な思いがあるようだ。

### 1-3-3. 清水武甲の息子へのインタビュー（2006年6月）

私は、武甲山の事を調べ始めてから何度も資料を求めに秩父市の図書館へ行った。武甲山の変化や秩父の文化・風土などのテーマで著作を検索すると、毎回のように清水武甲の著作がひっかかった。清水武甲（1913～1995）は、秩父では有名であった<sup>(36)</sup>という清水写真館を営みながら、自らも写真家として秩父の自然や武甲山の写真を撮り続けた人物である。武甲山の開発には異を唱えており、「一企業の利益のため山頂まで崩してしまうという事は全国的にもそのような例はなく、世界でもこんな例はないだろうといわれている」<sup>(37)</sup>などの文章を残している。

清水武甲本人は残念ながらすでに他界しているが、その息子が時間をさいて話を聞かせてくれた。清水武甲がいかなる人物であったのかという事はもちろんであるが、今回話を聞いた4人の中で唯一秩父市出身・在住ということで開発が行われた際の秩父市の様子も同時に聞くことが出来た。

まず開発が進んだ頃の秩父の人々の反応がどの様なものであったかを伺った。「戦後、高度成長のためにもセメントや鉄は基幹産業として重宝された。武甲山に関しては昭和30年代に発破の音が派手に聞こえ始めた、緑がなくなり始めるなど、目に見える採掘が始まった。当時武甲山の近くの小学校に通っていた私は、毎日昼に必ず行われる爆発によって巨大な岩が舞っているのをよく見た」のだという。しかし、「企業城下町」である秩父では、多くの人々が直接的、ないし間接的に「セメント<sup>(38)</sup>によって食べさせてもらって」おり、反対などをする人はあまりいなかったらしい。やはり、セメント関連の企業は市に対して多くの優遇措置をとったのだろうか。聞いてみた。「企業城下町だと『企業が金を出すのは当然』と見られることも多いが、実際は違う。地元出身の秩父セメントが突出して地元に貢献してくれた」が、なにもしない企業も多かったという。

しかし、昭和40年代に入り全国的に自然保護運動などが活発になると、企業側も表面的に派手な開発はしにくくなった。「中にトンネルを掘り、砕いた岩はベルトコンベアでそのまま外に持っていくなどの対策がとられるようになった」という。開発を行う場所

<sup>36</sup> 上記のジャーナリストに対するインタビューより。

<sup>37</sup> 清水武甲、『秩父II 山と生活』（言叢社、1983）83頁。

<sup>38</sup> 秩父の人々は当時、石灰岩の事を「セメント」と呼んでいたらしい。

を外から見えないようにする工夫もなされた。また、「武甲山を同じペースで崩し続けると2000年頃には全部取りつくしてしまう可能性もあったため、地下にトンネルを掘り群馬県で採掘した石灰岩を秩父の工場まで輸送して処理をする企業も現れた」。企業側も、地元の反発にあわないよう、努力をしながら開発を進めたのだ。

次に、父親である清水武甲がどのような人物であったかを聞いた。もともと写真屋の息子として生まれた清水武甲は幼い頃から自然の写真を撮っており、若くして写真で大臣賞も受賞するほどの腕前だったらしい。そして自分の育った秩父の自然を広く知ってもらうため、秩父の国立公園指定を目指した。「戦後で日本社会全体が荒廃している中、30代で、エネルギーのあった父は知事などの協力も得て、秩父を国立公園に指定してもらうために書類をまとめあげた」のだ。結局、東京の多摩と共に国立公園指定を受けることになったのだが、清水氏の意向で「秩父多摩国立公園」と秩父を先にしたのだそうだ<sup>(39)</sup>。

以上のように、清水武甲は秩父の自然を大切に思い、またそのための地道な作業を厭わない人であった。日本で一番古い自然保護運動という秩父自然保護運動を推進させ、また日本で初めて国立公園における木々の伐採を中止させた。「40年代の自然保護運動の原点は、親父だったのかもしれない」と息子はいう。ただし、その後の自然保護運動のように派手なメディア戦略などは一切しなかったらしい。学生運動やヒッピーなどが流行った時代、武甲山の開発反対のため秩父においてもそのような活動をしに来る若者がいたらしい。「確かに、親父がそれらを招き入れ、派手に行動を起こせば全国的にも知れ渡って開発が止む可能性はあったかもしれない。しかし、イデオロギーが持ち込まれて運動が過激化する危険性もあり、そうはさせたくなかったため断ったのだろう」と説明してくれた。清水氏はあくまで市民レベルで、底辺の運動を続けたのだ。昨年で35年目を迎えた、小中学生による作文・絵画コンクール「武甲山」もこつこつと地道に行ってきた活動の一部である<sup>(40)</sup>。

「継続は力なりという言葉があるが、このような地道な活動は最近よく行われる一日のお祭り騒ぎで終わってしまう様な自然保護運動とは全く異なる」と説明された。

また上記のことからも分かるように、秩父における運動は清水氏に一本化されていたのだ。開発の行き過ぎを懸念する人は清水氏の下へ集まった。そのため、清水氏は企業や市に対しても影響力を持ち、発言力があつたが、その分考えに賛同しない人からの嫌がらせや強迫まがいの事も耐えなかったという。

「今の皇太子がまだ学習院の学生だった頃に、削られて石灰岩の白い岩がむき出しになっている武甲山を見て『武甲山が泣いている』と言った」事を最後に教えてくれた。周りはその発言をもみ消そうとしたが、一部ではすぐに広まった。開発を止めさせるに好都合な発言だっただけに「秩父の開発反対派の人々は皆『しめた』と思った。親父も思ったと思う。でも、皇室(=イデオロギー)を持ち込みたくなかったからそれを前面に押し出し

---

<sup>39</sup> 後の2000年に名称が変わり、「秩父多摩甲斐国立公園」となった。

<sup>40</sup> 研究対象でも述べたが、清水氏が会長も勤めた武甲山植物群保護対策推進協議会によって毎年行われているもの。現在では市の活動の一環として、補助金も出ているのだという。



てアピールしたりすることはなかった」のだそうだ。

清水武甲のように、開発に異を唱え、また発言力がある人が秩父にも存在した。どの程度の人々がそれに賛同したかは分からないが、地道な努力をし続けた。しかし、裏を返せば地道な活動しか出来なかったのかもしれない。清水武甲も、開発に対して反対派ではあったものの、開発が地元の発展にとって必要なものであった事は理解していたという事もインタビューで聞くことが出来た。あまりに派手な運動を行い、セメント関連企業が秩父から撤回してしまう事を一方では恐れていたのかもしれない。

#### 1-3-4. アマチュアカメラマンへのインタビュー (2006年7月)

5月29日に放送されたNHKの番組、「小さな旅」は偶然にも武甲山と横瀬町をテーマにしたものであった。番組は主に二人の人物を追いながら進んだ。そのうちの一人がこのアマチュアカメラマンである。彼の妻が武甲山を好きだったこともあり、定年後17年間にも渡って毎日欠かさず武甲山をカメラに収め続けた。妻の容態が芳しくないようになってからは、毎日という訳にはいかなくなったものの、現在でも天気の良い日には自ら車を運転してその時期にもっとも武甲山が綺麗に見える場所へ向かう。アマチュアでありながら、自費出版で出した写真集も評判で、品切れになってしまった。現在(2006年7月)は次の写真集の制作のため日々自宅の部屋で2台のパソコンと向かい合って写真を整理している。

彼にはアマチュアカメラマンとして、またもともと秩父セメントに勤務していた人として、現在の武甲山に対して何を思うのか聞いてみた。

まず、武甲山について調べている旨を説明すると、「いいテーマじゃない」と言ってくれた。「石灰岩はセメントやコンクリートだけでなく、ゴムや鉄や車の部品などありとあらゆるものに使われている。またカルシウムだから牧場にまかれ、また利根川や荒川の源流である草津温泉から出る温泉に含まれる鉱物を中和してその水を使えるようにする役割も担っている」のだという。石灰岩が全て国民にとっての生活必需品であるため、取り上げる意義のあるテーマだという事だ。

次に、カメラマンにとって武甲山とは何なのかを尋ねた。「母なる山である」とすぐに返事が帰ってきた。「少し前の方は毎朝外で顔を洗ったが、外へ出たらまずおてんとさんと武甲山を拝んだ」のだそうだ。やはり武甲山は民間信仰の対象として大きな存在だったらしい。カメラマン自身にとっては、「生まれたときから見ている山だから」愛着があるのだという。秩父の人にとっては、例え住む場所から武甲山が眺められなくても地元のシンボルだそうだ。「一説には秩父には『武甲』がつく銘柄が2000以上もある」らしい。

その山を開発する職種に就いていたことに対して何か思うところはあるのか聞いた。すると「(武甲山の)姿が変わってもあまり何も思わない」という。むしろ、山を崩すことに

よって「現代人に貢献したと思った」のだという。「東京の人は恩恵」を受けており、そのもととなる石灰岩を崩すことには誇りを持っているのだ。

以前開発を行う側であったが、それに後悔して定年後に写真を撮り続けたのか、などと考えていたが、全く違う結果となった。「母なる山」ではあるものの、それを開発することに対しては誇りを持っていたのだ。

繰り返しになるが、4人とも異なった立場からではあるが、武甲山に関わってきた人物である。その分、武甲山への愛着はそれぞれあるようだ。しかし、武甲山の開発から直接的に恩恵を受けてきた人ばかりではないにもかかわらず、全員が開発には一定の理解を示していた。私は当初、武甲山の姿が変容してしまったことに対する嘆きを聞くことを予想していたが、それは外れる結果となった。「今のような姿になってしまった事は悲しい」や「昔の姿が懐かしい」といった事は言うのだが、秩父地域の、また日本社会の成長のため「止むを得なかった」という気持ちの方が強いのか。

また、地理的に首都圏に近いことから、開発の対象になりやすかった面はあるにせよ、国家政策的に外からの大資本や圧力によって無理やり開発が進んだという事でもないようだ。そのような、被害者的な意識は4人の誰からも感じられなかった。

#### [1-4. 仮説]

1-1から1-3までで、秩父地域の歴史や、武甲山開発の性格がある程度明らかになった。結局、秩父において目立った反対運動は起きなかった。清水武甲のような自然保護の立場の人もいたが、それらの人も含めて最終的には開発を容認するという点では見解が一致していた。秩父の人々と話をしていると、私もだんだんに開発はされてしかるべきで、正しい選択だったような気持ちになっていく。しかし、冷静になってから再び武甲山の姿を見ると、始めてみたときと変わらぬ違和感を覚える。「秩父地域のシンボルで、文化的・宗教的な要素も多分に兼ね揃える山があのような姿をさらしているのはおかしい」と感じてならない。

なぜ武甲山があのような様になってしまうまで秩父の住民は行動を起こさなかったのか。武甲山の開発が特殊な状況下に置かれていたということだろうか。もしそうだとすれば、何がその要因だったのか。ここでは、5項目に分けて武甲山の開発の特徴を示す。これらが複合的に重なったため、住民による表立った反対運動が起きなかったのではないかと考える。

##### ①開発が地元資本によって進められた

外の資本が流入し、儲けも外に吸い取られていってしまうような開発事例とは異なり、秩父地域で開発を進めたのは渋沢栄一や、秩父セメントの諸井一族を筆頭に地元の資本だった。そして秩父出身のジャーナリストによると、「諸井一族は地域のボスという立場ではなく、むしろ機織をしていた仲間であった」という。共に地元で産業を営んでいた「仲間」が、事業をはじめ、そのことによって地元にも利益がもたらされるという構造であったが故に、抵抗が少なかった事が推測される。もともと武甲山がただ採るだけの対象の山ではなく、生活のために利用することもあった点も見逃せない。地元住民は武甲山に資源が蓄えられていることを認識しており、開発の可能性があることもある程度察知していたのではないか。

地元出身であるために、企業側も地元民の気持ちを察することが出来た。武甲山総合調査や、横瀬歴史民俗資料館、武甲山資料館への出資を行うことから企業も地元配慮を行っていたことがわかる。

## ②地域産業の盛衰状況

上で示したとおり、秩父の産業の盛衰は激しい。もともとあまり米が取れなかった地域でもあり、明治以降は国策にも乗って絹産業とセメント産業が中心となって地域の産業・経済を支えた。その絹産業も、昭和30年代（1955～65年）から衰退の一途をたどった。セメント業が量産体制に入り、最も採掘量が多かった時期が昭和40年代であるから、セメント業の伸びが絹産業の衰退に影響された可能性は高い。地域を支える、ほぼ唯一の主要産業であったセメント業に、その時点で反発し、開発を中止させる事は地域経済の命取りとなりかねなかったことを考慮すると、清水武甲らが皇太子の「武甲山が泣いている」発言や、秩父にきた学生運動の人々を利用しなかったこともある程度理解できる。

## ③健康被害がほとんどでなかった

四大公害に代表されるように、戦後の高度発展期には工業の発展に伴って全国各地で健康被害が報告されている。武甲山開発とほぼ同時期に行われていた、千葉県君津市を中心とした山の土砂採掘事業の場合でも、土砂を運ぶトラックから発生した粉じんが人々の身体を蝕むという、明らかな健康被害が起きた。

それに対し、武甲山の開発では、目だった被害がほとんど報告されていない。埼玉県環境部公害対策課発行の『1973年度版 環境白書』において数件、粉じんによる被害が秩父市の周辺住民の間に起きたことが報告されているだけである<sup>41</sup>。調査の過程で、「秩父の

---

<sup>41</sup> 資料が限られているため、これだけをもって被害がほぼなかったと断言できない。しかし、武甲山における石灰岩開発の最盛期とも言える70年代前半に目立った被害が報告されていないことから、被害はごく

屋根は昔、(爆発によって舞い上がった粉じんによって)全部白かった」という住民の声を聞くことが出来た。しかし、それによって深刻な健康被害が出たという話は耳にしたことがないという。

1970年代に、より安全で効率的なベンチカット方式に採掘方法を変えるまでは、山肌にダイナマイトを仕掛けて、石が崩れ落ちた所を採取する方法をとっていた。そのため、開発業者の間に死傷者が出たことが幾度かあった(42)。1970年に通産省が採掘方法の再検討を通達していることが、これを裏付けている。しかし、繰り返しになるが、武甲山周辺の住民の間で目立った健康被害が起きることはなく、それが反対運動を起こさせなかった要因の一つなのではないか。

#### ④秩父事件を起こした過去を持つ

明治時代より、秩父地域では織物業が盛んだった。また、武甲山を利用した林業なども行われていたため、「皆が一定の収入があり、貨幣経済が成り立っていたからこそ松方財政のデフレの影響をもろに受けることになり、それに反発する形で困民党が生まれた」(43)。しかし、秩父事件は中央政府による弾圧により、失敗に終わる。これは秩父地域の人々の間ではトラウマになった。「それまで外の世界を知らず、井の中の蛙状態であった秩父の人々が、初めて中央政府の力を知った」(44)のだ。

このような歴史があるために、地元の資本による開発とは言え、国家政策的な性格があった武甲山の開発に反発する気が住民の間で起きにくかった可能性がある。

もっとも、秩父地域の住民の中でも秩父事件に参加していた人ばかりではない。御嶽神社の神主などはむしろ、一部の人が大騒ぎしたおかげで迷惑を被ったと話していた。秩父の人の間でも様々な立場があり、一概に言えないため、この仮説は弱いといえる。

#### ⑤環境破壊、公害の問題が出る以前からすすめられた

日本における開発や環境に対する社会の意識は、1970年ごろを境に急速に変化した。小熊は、1970年の6月に安保闘争が終わり、学生運動の矛先がマイノリティ問題などとともに環境保護、公害防止の方向に向きはじめたと分析している(45)。1953年の水俣病の問題化から始まった四大公害に対しても、1971年から1973年にかけて立て続けに原告勝訴

---

限られたものであったと推測できる。

その一方で、調査の過程で、「秩父の屋根は昔、(爆発によって舞い上がった粉じんによって)全部白かった」という住民の声を聞くことが出来た。多少の粉じんが舞っても、それを当時の人々が被害と認識していなかった可能性もある。

なお、環境対策が進んだためか、今ではそのような状態は見受けられない。

42 御嶽神社の神主の話。

43 秩父出身のジャーナリストの話。

44 秩父出身のジャーナリストの話。

45 朝日新聞社、『論座』2007年11月号

の判決が出た。一連の公害問題などを受けて、1971年には「公害の防止、自然環境の保護及び整備その他環境の保全を図り、国民の健康で文化的な生活の確保」のため環境庁が総理府の外局として設置された。また、海外においても、1972年にストックホルムにて第一回国連人間環境会議が開かれ人間環境宣言が採択されるなど、諸外国の間においてもこの時期に環境に対する意識が高まった。以上のことから、1970年ごろを境に環境に対するパラダイム転換が行われたと考える。

武甲山の開発は戦前から行われており、高度経済成長期に伴う開発に乗って成長を遂げる。国立公園や、県立公園に指定されていたとはいえ、それらの時期に住民が「環境破壊」を意識していたとは考えにくい。もちろん、自然愛好家や武甲山や秩父の自然をカメラに収めていた清水武甲のような人は危機感を抱いていた可能性はあるが多数派ではなかったのではないか。パラダイム転換の後に開発が大規模化していたら、結果は違ったのではないか。

次に他の地域における開発との比較を行う。秩父事件の歴史を持つことは、他の地域との比較が困難であり、また他の項目に比べて影響が弱いと判断する。そして、1、2をまとめて「地元への利益があった点」とし、「健康被害が出なかった点」、「歴史背景的に反対が起こりにくかった点」と合わせて3つの点から他の地域の開発と比較する。

## **第2章. 高尾山の開発**

ここでは、武甲山と同じく山の開発が行われた地域を3つとりあげる。

本来、学術的研究において比較検討を行う際には、限りなく条件の近い事例を提示し、その間の差を示すことが求められる。武甲山の場合であれば、同時期に石灰岩開発が行われた首都圏近郊の地域で、反対運動が起きた事例などを示すことが出来れば最適であろう。しかし、私の調査のなかでその条件を満たす事例を見つけることは出来なかった。そのため、ここでは年代や地域の状況、開発の性格が異なる事例であることを認識しつつも、3つの開発事例を取り上げ、それらとの比較を行うことで、1-4で示した仮説とのすり合わせ作業を行う。

### **[2-1. 山の開発と反対運動]**

1-4において示した仮説を確かめるため、また武甲山の開発の位置づけを明確にするためには、日本における他の開発とそれに対する地元住民の反応を知り、比較する必要がある。

ある。ここでは、足尾銅山の開発（1880～1900 年代）、千葉県君津市を中心とする山々の開発（1960～1970 年代）、高尾山のトンネル開発（1980～現在）の事例をとりあげる。それぞれ、国の発展やインフラ整備のための山開発であり、程度の差こそあれ、国策という性格がある。それぞれの時代背景や、開発の性格の違いを考慮にいれながら、「国の発展・整備」のために犠牲となった（またなろうとしている）地域に住む人々がいかに対応してきたかを明らかにしたい。

### 2-1-1. 足尾銅山の例

ここでは、日本の公害とそれに対する反対運動が起きた先駆けである足尾銅山の開発と、それに伴う地域住民の反応をとりあげる。武甲山と比較をするには多少無理があるかもしれないが、戦前の開発事例の代表例として取り上げた。「富国強兵」の時代、国の発展に直接関わる事業であった銅山開発と、それに対する住民の反対がどのようなものだったのか。その後の時代の開発事例とどこが違うのか、などに注目したい。

茨城県足尾地域のける銅の採掘は、江戸時代から幕府直営のもと行われていた。その後、明治以降の日本は、「富国強兵」や「殖産興業」の言葉に象徴されるように、国家の発展に向けて邁進を続け、特に、インフラ整備や工業の発展は急ピッチで進められた。大隈重信の後を受けて、大蔵卿となった松方正義の「経済政策の基調は、政商を中心とした大資本の育成」<sup>(46)</sup>であり、1877 年に京都出身の実業家である古河市兵衛（1832～1903）<sup>(47)</sup>に対して足尾銅山（茨城県、現日光市）を破格の値段で払い下げしたこともその一環であった<sup>(48)</sup>。古河の経営は、はじめこそ軌道に乗ることが出来ずにいたが、1881 年に富鉱脈を発見し、銅が電線や電気機器の基本原料として、「富国強兵」に不可欠な原料であったことから、急速に成長が拡大していった。

急速な生産拡大によってもたらされた環境への負荷は、すぐに顕著な被害として表れた。渡良瀬川水源における保水能力の低下は、度重なる洪水を招いた。また、鉱毒によって汚染された水は農業と下流における漁業に大きな被害をもたらしたにとどまらず、病気の多発など人々の健康被害にも及んだ。

しかし、度重なる被害の報告にも行政は鉱業の停止に踏み切ることはしなかった。国内銅生産の約 4 割を生産していた「足尾銅山より生ずる公利は、被害地の被害よりはるかに大にして、充分に損害賠償によって取り消しえられるべきものなり」と当時の農商務省鉱

<sup>46</sup> 牧原憲夫、『民権と憲法』（岩波書店、2007）66 頁

<sup>47</sup> 足尾銅山の成功を機に会社を発展させ、後の古河財閥まで発展させる。足尾銅山前はいくつかの事業に携わりながらも、挫折を繰り返す。紆余曲折を経て、渋沢栄一を後ろ盾につけてから 1875 年に鉱山経営をはじめ、1877 年から足尾銅山の経営を始める。

<sup>48</sup> 三井財閥が三池炭鉱の払い下げを受け、活動を本格化させたのも同時期のこと。

山局長が言ったとされる<sup>(49)</sup>。この言葉に象徴されるように、足尾の地域住民の被害はやむをえないものと考えられる時流がその時代にはあった。また、示談金・保証金<sup>(50)</sup>によって解決としようとする行政側の動きが幾度となくなされた。住民側もまた、しばしば交渉に応じた。その背景には、官尊民卑の考え方が根強く、「お国の政策には逆らえない」といった風潮が強かったことが挙げられる<sup>(51)</sup>。

反対運動は起きた。渡良瀬川沿岸の農民らが田中正造（1841～1913）を中心として、国の政策を批判し、足尾銅山の閉山を要求したのだ。運動開始当初（1890年前後）は、自由民権運動が盛り上がりを見せていた時代と重なり、国民の政治的関心も高かったために、大いに盛り上がった。しかし、「せっかくのこの機運も…明治政府の基盤が固まっていくにつれて急速にしぼんでいった」<sup>(52)</sup>。1903年に土砂崩れにより、汚染された土の上に新たな土が覆いかぶさってからは、農民の多くは問題が解決したとして鉍毒反対運動から離れていった。田中は1913年に亡くなるまで鉍毒反対を訴え、遊水地化のために廃村になることが国によって決められた谷中村にとどまったが、その頃までにはほとんどの農民が買収に応じ、故郷を離れていた。

時代は違うが、戦前の殖産興業の時代に銅資源の大きな割合を担った足尾銅山の開発と、戦後の高度発展期に首都圏のインフラ整備のため石灰岩を提供した武甲山の開発は、国家の発展期にその根幹をささえたという共通点がある。しかし、健康被害が目立たなかった秩父の例と異なり、足尾では鉍毒被害が発生した。また、秩父では地元資本によって開発が進められ地域の経済に貢献したが、足尾では地域は多少利益があったかもしれないが被害を被った渡良瀬川沿岸の農民らに利益はなかった。

次に反対運動という側面から比較しよう。足尾では、自由民権運動の波に乗り一時的なブームとして反対運動が盛り上がった。しかし、ブームが去った後は官尊民卑や富国強兵といった価値観の下住民は反対出来ないよう押さえ込まれた。また住民自ら騒ぎを大きくしないよう国の以降に従った。秩父の場合は、官尊民卑などの価値観はすでになかったため、押さえ込まれることはなかった。むしろ、反対運動を盛り上げるチャンスはあったものの、自ら盛り上がらなかった。反対運動を盛り上げようと外から来た学生を追い出したくらいだ。

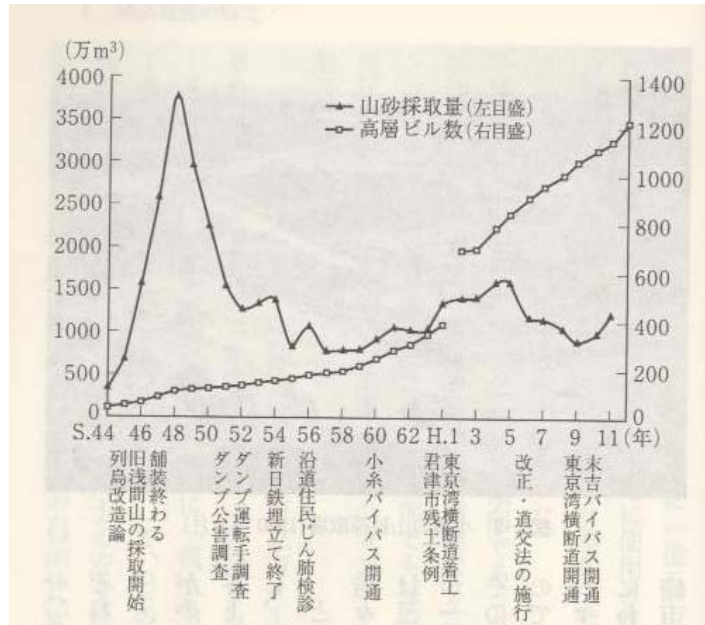
## 2-1-2. 千葉県の山々の例

<sup>49</sup> 布川清司、『田中正造』（清水書院、1997）41頁

<sup>50</sup> 示談金とは言っても微々たる金額で、しかも応じるのが後になればなるほどその額は更に減っていった。

<sup>51</sup> 1912年に谷中村を遊水地にするため、国が農民を追い出すため買収を繰り返した。これに対して素直に応じた農民も多く、田中は「谷中の滅亡も、谷中人民は政府を恨みず、これまた奇怪の観なり」との言葉を残した（布川清司、『田中正造』（清水書院、1997）66頁）。当時、国政策がいかに絶対的だったかがわかる。

<sup>52</sup> 布川清司、『田中正造』（清水書院、1997）68頁



＜図2＞千葉県中西部の山砂採取量ならびに東京都のビル数の増加状況。（佐久間充、『山が消えた』11頁より）

次に、千葉県君津市を中心とする、千葉の山々の開発の事例を取り上げる。時代は武甲山の開発とほぼ重なり、高度経済発展期の東京及び千葉や横浜の工業地帯の埋め立てや、建物の建設の

東京をはじめ、日本では戦後の高度成長期以降大小様々なビルが建設された。また東京湾の埋め立ても急速に進められた。そして、これらの作業に欠かすことが出来ないのが砂である。砂（や砂利などを合わせた骨材）はコンクリートの主原料としても使用されるため、首都圏の近代化・発展のため膨大な量の砂の需要が生まれた。

そこで目を付けられたのが千葉県の、特に君津市周辺の山々である。200～300メートル程度の低い山々が立ち並んでいたこの地域は、もともと良質の砂・砂利がある事で地域住民に知られており、地元の人々による採掘は戦前から行われていた。しかし、これは小規模なものであり、採掘が本格化したのは昭和30年代に他の業者も参入し、ダンプカーが使われ始めてからである。昭和48年（1973年）以後オイルショックの影響で山砂全体の採掘量は急激に落ち込んだ。しかし、それまでは昭和44～48年の4年間に採掘量を約8倍に増やす（662万立方メートル→5215万立方メートル）など年々急速に採掘量を増やしていった。ピークであった昭和48年には国内シェアの実に72%を占めるにいたった。君津市周辺の地域は「山砂の採掘によって丘陵が次々と姿を消し」た。また昭和33年に国立公園に指定された「鹿野山の場合は、いたる所に高さ100メートル前後の絶壁が出現し、山容が



無残に変わ」ってしまった<sup>(53)</sup>。最も凄まじいのは浅間山（せんげんやま）で、東京湾沿いにあったという地理的条件も関係して204メートルあった山は昭和46年に採掘が始まってから5、6年で姿を消した。山がなくなったことにより、ただでさえ地下水や生態系には影響を及ぼす事になるが、更に山の跡地に産業廃棄物の山が立ち並ぶ事によって問題はより深刻化した。

そして、最も深刻な問題であったのは開発が急速に進められた時期にダンプカーの交通量が急増（一日最大4000台）した事によってもたらされた交通公害である。ダンプカーが巻き上げた粉じんが家の中にまで入り込む、振動で壁にひびが入るなどした。「騒音、振動、粉じん、排気ガス、泥はね、石はね、交通事故などの被害があげられるが、これほど多くの項目が複合している交通被害は他に例がない」<sup>(54)</sup>と指摘されるほどであった。初めは仕事もらえると快く開発を受け入れた地元民も、難色を示すようになる。佐久間のように健康被害と環境破壊を訴えた地元民により、ダンプカーによる土砂の運送やその後の産業廃棄物処理関連の事業は部分的に変更を余儀なくされた。

この千葉の開発は、もともと地元の人々が細々と採掘をしていたという点や、大規模に採掘が始められるようになることを地元の人々が快く受け入れた点、また戦後の発展において東京を始め首都圏への運搬が楽に行える地理的条件であったという点など、武甲山の開発と似通っている点はいくつかある。ただし、開発が進むとともに住民に健康被害が出たことを契機に地元民が開発に反発を示すようになり、地元民対開発業者という分かりやすい構図が成り立った点は大きく異なる。秩父においては、武甲山の開発を通じて目立った被害は現れなかった。山は姿を変えていったが、地元の人々はそれによって恩恵を受け続け、反対運動等を起こす事はなかった。

武甲山の開発事例と、次に登場する高尾山の事例も含めて、1-4でしめした仮説に当てはめ、項目ごとにまとめたのが以下の表である。

	足尾銅山	武甲山	千葉の山々	高尾山
--	------	-----	-------	-----

<sup>53</sup> 佐久間充、『ああダンプ街道』（岩波書店、1984）ii頁

<sup>54</sup> 佐久間、同上書、40頁

<p>地元への利益の有無</p>	<p>京都出身の古河市兵衛が経営。地元の農家は農作物が被害を被った。僅かの示談金を受け取った住民もいたが、最終的に谷中村は廃村となったこともあり、地元で利益を受けたと感じる人はほぼいなかったと言える。</p>	<p>地元出身の諸井一族が経営しており、地元経済に貢献。「武甲山のセメント業が秩父地域を支えている」というのが、地域の人の一般認識。</p>	<p>住民は始めこそ地場産業の活発化を期待したが、後に被害ばかりで利益がないことを実感するが、山砂産業の住民もおり、一筋縄ではいかない。地元選出の政治家や、市は開発を歓迎した。</p>	<p>年間登山者数日本一の山、高尾山は大きな観光資源。しかし、八王子市のなかで高尾地域はごく一部。現職市長などは、高尾山のよさを認識しながらも、圏央道を通すことによる一層の地域活性化を期待している。</p>
<p>健康被害の有無</p>	<p>渡良瀬川に流れ出た毒による被害、及び弱まった地盤のために頻発した洪水被害で渡良瀬川周辺の農家に被害が出た。</p>	<p>埼玉県1973年度版の環境白書において、若干の粉塵被害が記録されている意外は、目だた被害なし。</p>	<p>土砂を運び出すダンプカーによる粉塵被害、騒音被害、交通事故が絶えず起きた。</p>	<p>工事中の事故や、道路建設による騒音被害があるが、まだ目立った被害は出ていない。</p>
<p>時代的背景</p>	<p>古河が経営を始めてから、8年後の1885年に朝野新聞によって鉱毒被害が報道される。時代的には、富国強兵が叫ばれており、多少の農民の被害より国家の成長が優先された。</p>	<p>1950年代から73年のオイルショックまでの時期が採掘量伸びた最盛期。経済成長真っ盛りの、「それいけどん」の時代。</p>	<p>武甲山と同様に、「それいけどん」の高度成長期に東京湾埋め立てや、高層ビル建設のために土砂需要が高まった。</p>	<p>圏央道計画が提案されたのは1967年だが、計画が公になったのは1984年で今でも論争が続く。環境が見直され始めた時代。</p>

本章のはじめにも述べたように、足尾、千葉、高尾の事例はそれぞれ国の発展や整備のために必要とされ、多かれ少なかれ国策という性格を持つ開発であるという点で秩父の開発と共通している。その中でも、本論文において高尾の事例を主な比較対象として選んだ理由は以下の6点に集約できる。

1. 反対運動が起きた点
2. 環境に対する社会の見方が変わった70年代より後である点
3. 目立った健康被害が起きていない点
4. 信仰の山として特徴が似ている点

5. 植物など、貴重な自然環境がある点
6. 都心から地理的に近い点

## 2-2. 高尾山の歴史

高尾山は、東京都八王子市にある標高 599m の山だ。決して大きくはないが、都心からの交通の便が良いなどの理由から東京都にある公立小学校の遠足先としては定番だ。年間来訪者数 260 万人は富士山より多く、日本の山としては最多である。武甲山と同様に、高尾山にも様々な植物が生息する。わずか 770ha の国定公園<sup>(55)</sup>ながら、1300 種類以上の植物が生息し<sup>(56)</sup>、かつ外来植物による侵入が極めて少ないなど首都圏では珍しい環境だ。それが認められ、2007 年 4 月には京都、奈良、高山、富士山などと並んでミシュランの旅行ガイドにおいて三ツ星評価を獲得した。また、武甲山と同じく高尾山も信仰の対象であり、山岳修行の場でもあった。その高尾山も開発の対象とされた。

ここでは、まず高尾山の信仰の歴史を紹介してから、開発の歴史へとうつる。

### 2-2-1. 信仰

武甲山は信仰の対象ではあったものの、山で修行が行われていたなどの宗教的な要素はなく、むしろ地域の生活に根ざした信仰という性格をもっていた。高尾山においても、頂上付近に薬王院があり、信仰の山という面があるが、果たしてその性格は武甲山と比較してどう異なるのだろうか。

「高尾山薬王院の梵鐘は、その銘によると寛永 8 年（1631）の鑄造となつて」おり、その他の薬王院の主要な建物もそれと同時期に作られたとされている<sup>(57)</sup>。中興開山によって、高尾山が信仰の地となったのはさらに遡ること 2 世紀半、永和年間（1375～79）の頃とされている。

薬王院が、修験道を行う真言宗であったこともあり、古くから修験道の山としての一面を持っている。しかし、同時に『貴賤上下』という、特定の人によらない信仰の対象という高尾山のイメージも 16 世紀ごろからできており、近隣の人々が参詣に集まる場であつ

---

<sup>55</sup> 秩父は秩父多摩国立公園として 1950 年に国定公園として指定され、2000 年に秩父多摩甲斐国立公園と名称が変わった。一方、高尾は 1950 年に明治の森高尾国定公園として国定公園に指定された。国立公園、国定公園共に自然公園法に基づいて環境大臣が指定する。国立公園は国が自ら管理するのに対し、国定公園は都道府県が国から委託されて管理する。

<sup>56</sup> この数はイギリス全土の植物数の 8 割に匹敵する。（橋本、「高尾山天狗裁判の新展開」『世界』、2002）

<sup>57</sup> 村上直、『近世高尾山史の研究』（名著出版、1998）34 頁

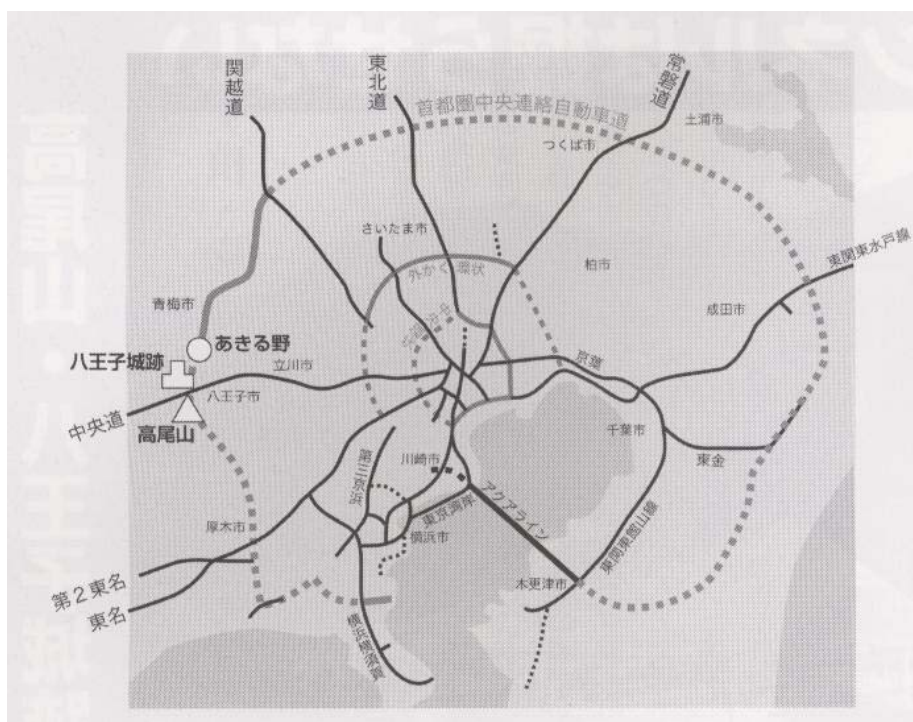
た。

高尾が位置する八王子は、別名が「桑都」であり、生糸産業の盛んな地域であった。また、高尾から江戸に通じる甲州街道沿いには、養蚕業が盛んな地域が数多く、それらの地域から高尾山に訪れる人々も一定数いた。それらの事にも影響され、高尾山信仰の御利益の中には鼠害封じがある。信仰が地域に根ざしたものであった証拠といえよう。

現在、高尾山には年間 260 万人が訪れ、日本一の集客力を誇る山であるが、高尾山の観光名所化は近世中後期（<sup>58</sup>）からすでにあつた。社寺を観光する人全てが信仰心を持っているとは到底いえないが、「人々が実際に参詣する寺社の取捨選択を行い、経済的な貢献をしているという事実は動かしがたいわけで、そうした行動も含めて『信仰』として把握すること」もある程度できる（<sup>59</sup>）。

以上のことから高尾山は修験道の山という武甲山にはない面を持ち合わせるが、地域の人々の生活に根ざした信仰の山であったという点では似ている。

## 2-2-2. 開発の歴史



<図 2> 圏央道計画の全容、また現在完成されている区間。

公害被害者総行動 30 年のあゆみ編集委員会編（2006）75 頁より

<sup>58</sup> 16 世紀頃をさしていると思われる。

<sup>59</sup> 村上直、『近世高尾山史の研究』（名著出版、1998）122 頁

1967年、当時の建設省から「東京第三外郭環状道路」の計画が提案された。この計画は、全長270kmの環状道路（圏央道）を造ることで首都圏の諸都市を結びつけるもので、東京都心へ集中する交通量を拡散させるなどの理由に基づいて計画が持ち出された<sup>60</sup>。翌年から調査が行われ、高尾山の下にトンネルを通す計画も徐々に練られていった。しかし、これらの計画は公に知らされる事はなく、高尾周辺住民は1984年になってはじめて知ることとなる。

一連の計画が決められた60年代後半から70年代にかけて、日本は高度経済成長を続けていた。国民総生産はますます伸び、「土地の買い占め、生産工場の移転、地価高騰、といった『それ行けどんどん』の時世」<sup>61</sup>だった。しかし、バブルの終焉とともにそのような流れも終わりを告げた。圏央道計画のうちすでに造られ営業が始まっていた鶴ヶ島―青梅間や、同じ時代に多額の投資によって造られた東京湾アクアラインで毎年赤字が出るなど、公共道路造りも見直しが迫られた。また、高尾においても「高尾山の自然を守る市民の会」を中心とする反対運動が起こり、2007年現在トンネルは貫通していない（工事の指し止めを求める裁判で6月に原告が敗訴となり、その後控訴の手続きをした。その間も、工事は進められている模様）。

### 2-2-3. 高尾山の自然を守る市民の会と高尾山天狗裁判：

1988年の八王子市長選挙で高尾山のトンネル開発反対を訴える市民運動家、山田和也（元TBSプロデューサー）が無名ながらに立候補した。広い八王子市において必ずしも全ての人が高尾山開発に関心を示した訳ではなく、選挙には敗れた。それでも、社会党・共産党の支援もあり、住民の45%の支持を得た。その彼が中心となって選挙後に「高尾山の自然を守る市民の会」（以後「市民の会」）が結成された。月に一度の会報や、講演会などを通じた啓蒙活動、「高尾山にトンネルを掘らせない」をスローガンにした開発反対署名活動（現在50万人を突破、目標は100万人）などがその主な活動内容で、それ以外にも他の市民団体や自然保護団体との交流も行っている。

現在900人の会員がいる「市民の会」は、国や都が開発を止めるよう粘り強く反対運動を続けた。「2000年10月25日、運動を続けてきた住民たちは、高尾山・八王子城跡間の約5キロの圏央道工事の差し止めを求めて東京地裁八王子支部に民事訴状を起こした。この裁判は、高尾山の守り神である天狗の名をとり「高尾山天狗裁判」と名づけられた。」<sup>62</sup> その訴えの主な根拠は、①高尾山を含む周辺地域が都立自然公園、国定公園などの指定を

<sup>60</sup> 青梅市今井と八王子市南浅川町をつなぐ22.5kmの間で高尾山周辺を通る計画だった。また、270kmの計画全体に関しては、2001年現在完成しているのは全体の7.3%に留まっている。

<sup>61</sup> 辰濃和男、『高尾山にトンネルは似合わない』（岩波書店、2002）より

<sup>62</sup> 五十嵐・小川、『工業事業は止まるか』（岩波書店、2001）より

受けているにも関わらず開発が進めようとしている、②圏央道によって風景・景観が破壊される<sup>63</sup>、③圏央道が通れば、空気汚染などの環境破壊が起きる、などだ。

天狗裁判は、最近では2007年6月15日に東京地裁八王子支部において工事指し止めを求める原告が敗訴した。その後、再び控訴し今後も引き続き争われる。

しかし、同様の市民運動による2004年4月の圏央道あきる野の土地収用裁判では、東京地裁が一審にて地権者・住民の訴えを認め、事業認定と収容裁判を取り消す判断を下している。二審では逆転して行政勝訴となったが、地元住民にとっては手ごたえを得る判決となった。

### 2-3. インタビュー

秩父と高尾はともに、地域のシンボルであり、古くから信仰の対象でもあった山が開発の対象になった。しかし、秩父では起こらなかった住民による反対運動が高尾では起きた。ここでは、反対運動に携わっている二人の人物に対して行ったインタビュー調査を紹介する。

一人目は、「市民の会」の事務局長だ。この人物は、上記の88年の八王子市長選挙で山田を支えた後、脱サラをして「市民の会」の活動に専念する。天狗裁判においても中心的な役割を果たしている。二人目は、教師として勤めた後に高尾の自然を守るために神主になった経歴をもつ人物だ。現在高尾山の隣に位置する金比羅山の神社で神主をしている。二人には、運動に携わるようになった経緯や、運動の意義などについて話を聞いた。

#### 2-3-1. 「市民の会」事務局長へのインタビュー（2007年11月）

橋本は北海道出身の、1945年生まれ。本人曰く「大学は共産党色が強く」、本人も学生時代は学生運動に参加しており、この頃から社会に関する関心が高かった。また出身地域や北海道各地が公共事業潰けになり「総夕張化」していく様を見てきたことから公共事業に関心を抱いた。現在は、「市民の会」と平行して同じく市民運動団体である道路公害反対運動全国連絡会の事務局長も兼任している。

高尾地域には69年に電子メーカーに就職したことを契機に移り住んだ。高尾山の最初の印象は、「正直なところ、そんなに凄い山だとは思ってもみなかった。気楽なレクリエーションの場という以上の印象はなかった」という。その橋本も、8年前（2000年ごろ）から「市民の会」の事務局長となり、今では「市民の会」のスポークスマンとして様々な講演

---

<sup>63</sup> ここでの風景や景観は、単に視覚的な問題ではない。視覚的に美しくても、騒音や悪臭があつてはいけないという意味で、全感覚に関わっている。

をこなし、また雑誌や書物に文章を書く多忙な日々を送っている。橋本自身がどのような経緯で「市民の会」の活動に携わるようになったのか、どのような人が会員になっているのか、武甲山の開発と高尾山の開発を比較してどのような考えを持つのか、など発表されている書物では分からなかった事を中心に話を聞いた。

一通り私から自己紹介と研究テーマについての説明をすると、「今週尋ねてきた学生は君で3人目だよ」とこのようなインタビューには慣れていることを明かしてくれた。慶應大学にも知人の教授の授業でゲストスピーカーとして話す機会が過去にあったらしい。今までインタビューを実施した秩父の人たちにこのような人はなく、もはや過去の事となりつつある武甲山の開発と、現在進行形で運動が進んでいる高尾の開発の違いを思い知らされた。

話慣れをしている事が影響してか、あるいはこれだけは知っておいて欲しいとの思いからか、まずは彼が圏央道開発の問題点や自然に関する考えを話してくれた。「高速や道路があれば便利なのはあたりまえ。そして、確かに整備が必要とされていた時代もあったが、今はいきすぎ。圏央道に限らず、道路の建設は金食い虫だ」。道路公害反対運動全国連絡会の事務局長も務める橋本は、道路建設に対してシビアだ。「総距離 270 キロの環状道路なんか、世界的に類をみない。これも完成すれば便利なのは当たり前だが、1メートル当たり 2000 万円、高尾山にトンネルを掘るなら1メートル当たり1億円かかる。国に金銭的余裕がないのは明らかだし、それ程金をかけるだけのニーズがあるとも思わない」。アクアラインなど、圏央道計画のうちすでに開通している区間も、行政側が当初予想していた交通量の3割ほどにしか至っていない。

行政側が圏央道を計画した理由としては、「都心に直接用がない車が、しかし道路の関係上都心を通らざるを得ない状況が生まれ、そのため都心で交通渋滞が生じる。圏央道を通せば、それが緩和できる」という点が挙げられる。都心に住む私にとっては説得力がある理由であった。それに対して橋本は、「確かにとても論理的に聞こえる。私たちもはじめはその論理には太刀打ちできないと思った」と言う。「しかし、首都高利用者にアンケート調査を行ったところ、東京に用がなく、通過するだけの車は1.2%のみだった。多くの車は東京に用があってきているのであり、要は産・官・学が東京に一極集中しているという根本的な構造を解決しなければ都心の渋滞は解決しない」のだと力説した。そのようなデータが出ているにもかかわらず、行政側が計画を変更しないのは何故だろうか。それは「作ることが目的」だからだ。政治家、官僚、産業の三者がそれぞれ我が身の保身を気にして、計画の変更を出来ずにいる現状を、橋本は丁寧に話してくれた。

そして、「しかし、これは時代の流れに逆行している」と自らの自然観を展開した。「道路が足りないから道路を作ると言う理論が通じる時代ではなく、むしろ道路を増やせば、その分車も増える誘発効果が起きる事はもはや常識」だという。環境への負荷を考慮にいられて、EUでは車の抑制が進められており、最近ではフランスのサルコジ大統領が高速道

路と空港の建設凍結を決めた（2007年10月25日）。隣国韓国でも、ソウル市内を流れる清溪川（チョンゲチョン）の河川復元事業が進められており（<sup>64</sup>）、「OECDの国々の中でもこの流れに逆行しているのは日本だけ」と嘆いた。「私は、自然環境はどのような政策にも勝ると思う。今の時代の人たちの多数決で決めていい問題ではなく、このような人間中心主義は改めるべきだ」。

一通り橋本が話し終えてから、こちらからいくつか質問をさせてもらった。

まずは橋本自身がどのように「市民の会」の活動に参加していったのかを聞いた。「1988年の山田さんの選挙を手伝ったところから始まった。（電子メーカーでの）仕事も20年くらい続けたが面白くなくなっていたし、仕事を辞めてのめりこんでいった」という。では橋本以外の会員はどのような人々なのだろうか。やはり地元住民が多いのだろうか。「市民の会」のホームページには、現在会員が900人余りであることが掲載されているが、その内訳を聞くと、地域住民が半数強で、東京都民が8～9割だという。雑誌などでは、運動に参加するために高尾に移り住んだ人も紹介されていたが、そのような人は必ずしも多いわけではない。

次に橋本が何を「市民の会」の活動の最終目標と据えているかを聞いた。ホームページなどでは、住環境の悪化を訴えて圏央道建設反対を訴える住民もいる一方で、橋本自身はそのような主張とは距離をおき、より環境保護に主眼を置きながら次の世代の人々のために自然を残す事を活動の役割としている印象を受けたからだ。橋本は「事務局長の私がこんなことを言うてはいけないかもしれないけど」と断りながら、慎重に語り始めた。「裁判の勝敗はいずれつくもので、もちろん勝つことは大事だけど、それだけを意識してはいけない。重要なのはそのような行動を起こしたという事実を残すことだと思う。そのような市民の行動の積み重ねが時代を動かしてきた。四大公害にしろ、薬害肝炎にしろ、時間がかかったが裁判官も徐々に企業の責任、そして国の責任を認めて今日に至っている。あきる野での裁判結果（<sup>65</sup>）は大きな前進であり、今後も少しでも世論をそして裁判官を動かしていけるよう努力したい」と本音を語ってくれた。

橋本や「市民の会」のサポーターの一人である辰濃和夫の文章を読んでいて私は常々、「高尾山がこれほど来訪者の多い、また貴重な自然を保有する山でなければこの運動は起こりえただろうか」という疑問を抱いていた。そこで、率直にこの質問を橋本に投げかけてみた。すると、「結論から言うと、広がらなかっただろう」という答えが帰ってきた。「国側は高尾が国定公園であるがために土地の買収の必要がないとみてここに圏央道を通そうとした。それが我々にとっても好都合だった。高尾山ほど多くの人に対して自然環境を主張しやすい山もあまりないのではないか」とのことだ。自らの運動へのかかわり方について

<sup>64</sup> 2007年12月に時期大統領に選ばれた李明博がソウル市長時代に行った。李明博、『都市伝説 ソウル大改造』（マネジメント社、2007）

<sup>65</sup> 圏央道の土地収用に反対する、住民による裁判。道路の建設による自然破壊と、道路完成によって生じる可能性のある道路公害を主張し、原告が勝訴、事業の取り消しを勝ち取った2000年の裁判。



も、「高尾山でなければここまでコミットしかなかったかもしれない」と言及した。

最後に、武甲山の事例に対して意見を求めた。高尾山のトンネル開発との一番の違いは、秩父は当時石灰岩を大規模産業化する以外に地域としての収入源がなかった点である。橋本は「秩父の事例については詳しく知らない」と前置きしつつも、「経済、利益中心だと環境が押しやられてしまう。やはり一定の規制はされる必要があったのではないか」と語った。また地元北海道の例も挙げながら「住民の一時的な利益を考えたら公共授業を続けるべきかもしれないが、そういう問題ではない」、と長期的な視野で地域のためになる解決策を模索すべきと指摘した。

### 浅川金比羅山神社の神主へのインタビュー（2007年11月）

奥田は京都出身の、1942年生まれ。橋本と同じく学生時代には学生運動に携わり、自治会の副委員長まで務めた。大学での専攻は美術で、卒業後は小学校教師として「京都の田舎」で勤務した。同じく教師で東京在住の妻と結婚するために東京に移り住んで以降、40年余りに渡って高尾地域に住んでいる。東京に来てからも50半ばまでは教師として働き、その後も義理の父の後をついで保育園の理事長を現在まで務めている。教育者として20冊以上の本を執筆しており、専門学校教員として未来の保母さんを指導する立場でもある。また、プロのマジシャン、チャーリー奥田としても活躍中。多才な人物だ。

そんな奥田が10年ほど前に金比羅山の神職については信仰心からではなく、自然保護運動の立場からだ。金比羅山とは、高尾山の向かいにある200mそこそこの山で、戦前までは信仰の山として地元住民に親しまれていた。しかし、戦争の動乱からそのような性格が薄れていった。そんな金比羅山に開発の話が持ち上がったのが1980年代初頭。頂上部分を切り取って、私立高校を建設しようと言う話が出たのだ。奥田ら地元住民はそれに反対し、開発を阻止するためにも戦前行われていた月に一度の祭事を復活させようと考えた。同時期にバブルがはじけたことも影響し、反対運動が功を奏し開発はされずに済んだ。しかし、「いったん始めたことは責任を持って続けよう」と祭事は続けることにし、紆余曲折を経て奥田自身が3代目神主となったのだ。その後も「祈りから行動へ」を自らのスローガンに、発言・行動をする神主として自然保護運動にも参加し、「市民の会」の事務局員として名を連ねている。

そんな異色の神主である奥田に、神主として自然保護に携わるることについて、高尾山のお寺薬王院のトンネル開発への対応について、そして私がインタビューを行った武甲山の御嶽神社の神主の受け答えについて、など話を聞いた。

まずは神職という立場で自然保護などの社会運動に与することの意味について聞いた。「日本の神社の9割は国の神社庁に加盟している。加盟している神社の神主はその圧力か

ら目立った社会的な発言はしにくい。私は加盟してないから自由」とのことだ。神職として以外の収入があり、必ずしも「金のためにやっている訳ではない」点も様々な発言がしやすい背景だと言う。「神社にしろ、お寺にしろ、献金をもらえないと生計を立てられない場合が多い。そして、政治家など地域のボスが一種のスポンサーとなっている事も多く、それらの人の政策を批判するような行動には出にくい」と教えてくれた。現在の高尾山薬王院の住職はトンネル開発に関して「信者には開発に賛成の人も反対の人もいるから・・・」と明言を避けているらしいが、それも上のような背景からではないかという見解も示した。確かに、薬王院周辺には献金者の名前を刻んだ柱が無数に見受けられた。

奥田や、その前任者達は金比羅山の学校開発や、現在の高尾山開発に際して、神の名の下環境保全を訴えている。また、元々が神職でないだけに「神職という立場を利用して」などの批判もあるだろう。それに対しての意見を求めたところ、「確かにそういう批判をする人は多い。だが、自然を守ることが神に背いているとは思わない」とあっさり答えた。「金比羅山神社では自然護持・未来永劫という教えを合言葉にしているが、自然環境のありのままを保つことが大事だと思う。自然保護という言葉は、人間が自然を守ってあげるというニュアンスがあってあつかましいから好きでない」とも言及した。ついでに「幸運にも今のところ罰もあたってないし、自分の言動に神の許しがおおりたと勝手に思っている」とユーモアを交えて持論を述べた。

最後に、武甲山御嶽神社の神主が開発を容認した事に対して、同じ神主としてどう考えるか尋ねた。すると、「住民あつての神主であるから、その立場は理解できる」と前置きしつつも、「しかし山自体が御神体であり（山が消えても神はそこに残ると解釈した御嶽神社の神主の説は）宗教的立場から誤っている。また現実に開発が行われたとしても、精神的にはいけないことなんだと説いたり、許しを請うような祭事を行ったりと一定の配慮を示すべきではないか」と考えを明かした。

### 3. 結論

<武甲山開発の特殊性について>

武甲山の開発は、住民同士や住民と開発業者などの間で目立った大きな対立がないまま進んだことが特徴的といえる。私は論文を書き始めた当初、「国家政策的に一方的に行われた開発に対してなす術を持たない、可哀相な秩父民衆像」を抱いていた。しかし、実際はこの仮説と違った。変容した武甲山の姿に対して残念がる声は随所において拾うことが出来たが、開発を全否定する声は、調査不足もあるかもしれないが、結局聞くことが出来なかった。地元利益がおりた点や、健康被害が起きなかった点、また 1970 年頃に起きた環境

に対するパラダイム転換よりも前に開発が本格化したため自然破壊との認識がなかった点などが複合的に合わさった結果、反対運動が起きないまま今に至ったことが明らかになった。

#### <開発を取り巻く環境の変化>

本研究は、武甲山の開発という個別具体的な事例から問題意識が始まっている。しかし、武甲山の事例を分析する過程で他の開発事例にも多く触れ、開発をめぐる環境の変化を知ることが出来た。

戦前の足尾銅山の時代には、「殖産興業」や「富国強兵」のスローガンのもと開発が最優先で行われていった。「足尾銅山より生ずる公利は、被害地の被害よりはるかに大にして、十分に損害賠償によって取り消しえられるべきものなり」と言う当時の農商務省鉱山局長の言葉は多少極端な例かもしれないが、当時の時代の雰囲気は伝わる。農民の側も、国の政策には従うべしとの考えが強く、理不尽であっても国の政策をそのまま受け止めていた。

戦後の高度成長期の頃には、戦前のようなスローガンはなくなっていた。しかし、環境に対する意識は低く、都市のインフラ整備や工業化のための急速な発展は自然環境や人間の生活環境に多大な負荷をかけた。その結果公害問題が発生し、1970年頃を境に、環境や公害に対する社会の意識が急速に高まっていく。一種のブームでさえあった。

圏央道の計画が公になる1980年代の半ばにもなると、公共事業を含めた開発の見直しが行われ始める。この時代になると、人に対する直接的な健康被害がある場合はもちろんのこと、問題が起きる前においても問題提起するケースが出てくる。そして、2000年のあきる野における裁判では健康被害を防止する裁判として原告が勝利する画期的な結果を勝ち取った。

そして、2000年代。高度成長期、バブル経済期を経てやっと開発が落ち着いてきた。一度立ち止まり、今までの事を振り返り、冷静に今後を見据える時期なのではないか。ソウルで清溪川の復元事業が行われたり、フランスでサルコジ大統領が高速やダムの一律凍結を行ったりしたのは時代の流れのように思える。日本においても1970年代の環境に対する住民運動や公害関連の本が見直されここ2、3年の間に相次いで復刊している事がそれを象徴しているのではないか<sup>66</sup>。

また、「裁判の勝敗はいずれつくもので、もちろん勝つことは大事だけど、それだけを意識してはいけない。重要なのはそのような行動を起こしたという事実を残すことだと思う。そのような市民の行動の積み重ねが時代を動かしてきた」と「市民の会」の事務局長が言った言葉が印象的だ。国立において景観を守るためにマンション建設反対を主導した、石

---

<sup>66</sup> 宇井純、『新装版 合本 公害言論』(亜紀書房、2006(1971年初版))、中村紀一編、『住民運動“私”論』(創土社、2005(学陽書房、1976の復刻版))など

原も同様の趣旨の事を主張している<sup>(67)</sup>。確かにそのように思う。足尾銅山が現代において注目されるのは、田中正造をはじめとする反対運動の記録が残っているからである。また、君津市や四大公害病の例はその後の公害防止の歴史を作った。しかし、歴史を動かすのは何も行動が起きた場合だけではないように思う。秩父において反対運動は起きず、また住民も開発を否定的に語ろうとはしない。しかし、武甲山の今の姿は現代の私たちに教訓を投げかけているように感じる。たとえば、「自然は有限なもので、開発を一度やってしまったら元には戻せない」と語りかけてはいないだろうか。

#### 付記：

研究を進めていた最中に「高尾山の自然をまもる市民の会」事務局長の橋本氏が八王子市長選挙（2008年1月20日告示、27日投票）に立候補した。無所属で共産党、社民党、生活者ネットの推薦を受け、自民・公明の推薦を受けた無所属の現職（3期目を目指す）と一騎打ちになった（朝日新聞、2008年1月21日、朝刊）。橋本氏は福祉政策の充実とともに、高尾山を守ることの重要性を主張した。それに対し、現職（黒須隆一氏）は、市議の時代から圏央道推進派であり、選挙でも圏央道を早期に完成させることの重要性を主張しただけに、選挙の争点は圏央道開発や自然環境になることは必至だった。

結果的に敗れはしたものの、6万3千票を超える票を獲得し（当選した黒須氏は8万4千票あまり）ほぼ無名の新人としては善戦した。民主党がどちらも推薦していないだけに、自民・公明へのアンチが橋本氏への票を多くしたと見ることも出来るが、時代の流れとして環境重視、開発の見直しという方向へ着実に進んでいるように感じた。

## 参考・引用資料

### 書籍

- ・ 李明博、『都市伝説 ソウル大改造』（マネジメント社、2007）
- ・ 家木成夫、『環境と都市の公共性』（都市文化社、1997）
- ・ 五十嵐敬喜、小川明雄編著、『公共事業は止まるか』（岩波書店、2001）
- ・ 石原一子、『景観にかける』（新評論、2007）
- ・ 稲本洋之助・小柳春一郎・周藤利一、『日本の土地法—歴史と現状』（成文堂、2004）
- ・ 宇井純、『新装版 合本 公害言論』（亜紀書房、2006（1971年初版））
- ・ I.ウォーラーズテイン、『史的システムとしての資本主義』（岩波書店、1997）
- ・ 今村奈良臣・向井清史・千賀裕太郎・佐藤常雄、『全集 世界の食料 世界の農村 ⑨

<sup>67</sup> 石原一子、『景観にかける』（新評論、2007）265頁

- 地域資源の保全と創造』(農山漁村文化協会、1995)
- ・ 大畑博次他編集、『社会運動の社会学』、(有斐閣、2004)
  - ・ 岡田昌彰、『秩父武甲山の景観変容とイメージ変遷に関する研究』(『第35回日本都市計画学会学術研究論文集』、日本都市計画学会、2000)
  - ・ 川名英之、『ドキュメント日本の公害 第一巻公害の激化』(緑風出版、1987)
  - ・ 北村修二、『開発か環境か ―地域開発と環境問題―』(大明堂、1999)
  - ・ 木原啓吉、『暮らしの環境を守る アメニティと住民運動』(朝日新聞社、1992)
  - ・ 木村万平、『京都破壊に抗して ―市民運動20年の軌跡―』(かもがわ出版、2007)
  - ・ 久喜邦康、『秩父 環境の里宣言』(創森社、2004)
  - ・ 公害被害者総行動30年のあゆみ編集委員会編、『公害被害者総行動30年のあゆみ』、(全国公害被害者総行動実行委員会、2006)
  - ・ 小疇尚、『山を読む 自然景観の読み方3』(岩波書店、1991)
  - ・ 埼玉県環境部公害対策課編集・発行、『1973年度版 環境白書』(1974)
  - ・ 堺屋太一、『日本を創った12人 後編』(PHP研究所、1997)
  - ・ 佐久間充、『ああダンプ街道』(岩波書店、1984)
  - ・ 佐久間充、『山が消えた 残土・産廃戦争』(岩波書店、2002)
  - ・ 佐藤仁、『稀少資源のポリティクス』(東京大学出版会、2002)
  - ・ 篠塚昭次・宮本憲一・早川和男・ヘルムート・フォン・イェンキス編、『都市の風景 ―日本とヨーロッパの緑農比較―』(三省堂、1987)
  - ・ 柴田徳衛・松田雄孝、『公害から環境問題へ』(東海大学出版会、1986改訂)
  - ・ 清水武甲、『秩父I 風土考』(言叢社、1983)
  - ・ 清水武甲、『秩父II 山と生活』(言叢社、1983)
  - ・ 清水武甲・千嶋壽、『秩父路50年』(新潮社、1986)
  - ・ 清水武甲編、『秩父学入門』(さきたま出版会、1984)
  - ・ 社史編さん委員会、『百年史 日本セメント株式会社』(日本セメント株式会社、1983)
  - ・ 全国自然保護連合編、『自然保護事典① 山と森林』(緑風出版、1996)
  - ・ 西村幸夫他、『都市問題公開講座ブックレット5 景観法はまちの魅力を引き出せるか』(東京市政調査会、2005)
  - ・ 日本経営史研究所、『小野田セメント百年史』(小野田セメント株式会社、1981)
  - ・ 辰野和男、『高尾山にトンネルは似合わない』(岩波書店、2002)
  - ・ 武内和彦・鷺谷いづみ・恒川篤史編、『里山の環境学』(東京大学出版会、2001)
  - ・ 千嶋壽、『秩父大祭』(埼玉新聞社、1981)
  - ・ 秩父観光協会編、『ガイドブック ちちぶ』、(秩父観光協会、2005)
  - ・ 秩父市教育研究所、『秩父教育 第50号特集 武甲山』(1965)
  - ・ 秩父市誌編纂委員会、『秩父市誌』(埼玉県秩父市、1962)
  - ・ 秩父市市民環境部・環境衛生課公害係編集・発行、『秩父市の環境』(2003)

- ・ 秩父市立秩父図書館編纂、『秩父市誌 続編 I』(埼玉県秩父市、1969)
- ・ 秩父事件研究顕彰協議会編集、『秩父事件』(新日本出版社、2004)
- ・ 秩父セメント株式会社編集・発行、『秩父セメント五十年史』(1974)
- ・ 秩父セメント株式会社編集・発行、『三十年小史』(1953)
- ・ 秩父病院百周年記念誌編集委員会、『秩父病院百周年記念誌』(秩父病院、1997)
- ・ 通商産業省立地公害局監修、『産業と公害』(通産資料調査会、1993)
- ・ 中村紀一編、『住民運動“私”論』(創土社、2005 (学陽書房、1976 の復刻版))
- ・ 西山卯三、『京都の景観 私の遺言』(かもがわ出版、1994)
- ・ 菰塚一三郎・金子吉衛、『埼玉の先人 渋沢栄一』(さきたま出版会、1983)
- ・ 長谷敏夫、『日本の環境保護運動』(東信堂、2002)
- ・ 八王子市史編さん委員会、『八王子市史 上巻』(八王子市役所、1963)
- ・ 八王子市史編さん委員会、『八王子市史 下巻』(八王子市役所、1967)
- ・ 林迪廣・江頭那道、『歴史的環境権の社会法』(法律文化社、1984)
- ・ 原強、『現代環境論入門』、(かもがわ出版、2006)
- ・ 布川清司、『田中正造』、(清水書院、1997)
- ・ 武甲山植物群保護対策推進協議会編集・発行、『作文武甲山の特集』(1967~2005)
- ・ 武甲山資料館、『武甲山資料館報 1号』(武甲山資料館、1990)
- ・ 武甲山総合調査会、『秩父武甲山 総合調査報告書 [上巻] 自然編』(言叢社、1987)
- ・ 武甲山総合調査会、『秩父武甲山 総合調査報告書 [下巻] 人文編』(言叢社、1987)
- ・ 武甲山総合調査会、『秩父武甲山 総合調査報告書 [別編 3] 横瀬町地誌』(言叢社、1987)
- ・ 牧原憲夫、『民権と憲法』(岩波書店、2007)
- ・ 箕浦康子、『フィールドワークの技法と実際』(ミネルヴァ書房、1999)
- ・ 村上直、『近世高尾山史の研究』(名著出版、1998)
- ・ 森元孝、『逗子の市民運動』(御茶の水書房、1996)
- ・ 守屋忠之、『武甲山植物誌』(秩父プリント社、1970)
- ・ 守屋忠之、『秩父武甲山石灰岩特殊植物群落の現状』(『遺伝』26 巻 6 号、1972)
- ・ 守屋忠之・井上茂著、武甲山植物群保護対策推進協議会編集・発行、『写真集 武甲山の植物』(1978)
- ・ 安田喜憲・菅原聰、『森の文明』(朝倉書店、1996)
- ・ 山村恒年、『検証しながら学ぶ環境法入門』(昭和堂、2006)
- ・ 寄本勝美、『公共を支える民』(コモンズ、2001)
- ・ 吉川栄一、『企業環境法』(ぎょうせい、2005)
- ・ 渡辺修五、『「生活景観」に関する住民運動について』(政策・メディア研究科修士論文 (2004))

雑誌：

- ・ 朝日新聞社、『論座』2007年11月号
- ・ 岩波書店、『世界』2002年12月号
- ・ 岩波書店、『世界』2007年9月号

#### パンフレット等：

- ・ 太平洋セメント株式会社、「Eco Factoring 地球のための仕事をしよう」(2006)
- ・ 武甲山資料館、「武甲山資料館」
- ・ 武甲山御嶽神社、「参拝のしおり」
- ・ 三菱マテリアル株式会社、「MITSUBISHI」(Corporate Profile)、(2006)
- ・ 横瀬町歴史民俗資料館、「武甲山信仰と秩父札所」
- ・ 横瀬町歴史民俗資料館、「武甲山百景」(2003)
- ・ 横瀬町歴史民俗資料館、「横瀬町歴史民俗資料館要領」

#### テレビ：

- ・ NHK、「小さな旅 武甲山みつめて～埼玉県横瀬町～」、2006年5月29日

#### URL：

- ・ 国史跡八王子城とオオタカを守る会、<http://www.e-sit.jp/~hachioujijyou/>
- ・ 国土交通省、「国土形成計画」、<http://www.kokudokeikaku.go.jp/index.html>
- ・ 埼玉県総合政策部文化振興課、「埼玉ゆかりの偉人データベース」、  
<http://www.pref.saitama.lg.jp/A02/BP00/ijindatabase/index.htm>
- ・ 高尾山天狗裁判、<http://homepage3.nifty.com/takaosan-tengusaiban/index.html>
- ・ 高尾山の自然を守る市民の会ホームページ、<http://www.naturetakao.com/>
- ・ 秩父市、「秩父市 Home Page」、  
[http://www.city.chichibu.lg.jp/cgi-bin/odb-get.exe?WIT\\_template=AM040000](http://www.city.chichibu.lg.jp/cgi-bin/odb-get.exe?WIT_template=AM040000)
- ・ 秩父石灰工業株式会社、「秩父石灰工業ホームページ」、  
<http://www.titi-lime.co.jp/index.html>
- ・ 橋本よしひろウェブサイトProject8(2008年1月27日投票、八王子市長選挙用サイト)、  
<http://www.project8.jp/index.html>
- ・ 八王子市、「八王子市」、<http://www.city.hachioji.tokyo.jp/index.html>
- ・ みずほ情報総研、「躍動の都市ソウルを行く第三回清溪川(チョンゲチョン)復元事業」、  
<http://www.mizuho-ir.co.jp/research/seoul050217.html>
- ・ 横瀬町、「埼玉県秩父郡横瀬町ホームページうららかよこぜ」  
<http://www.town.yokoze.saitama.jp/>
- ・ JANJAN全国政治家データベース、「八王子市長選/街頭演説 一ザ・選挙」  
[http://www.senkyo.janjan.jp/special/speech/2008hachioji\\_gaitou.html](http://www.senkyo.janjan.jp/special/speech/2008hachioji_gaitou.html)

その他：

- ・ 武甲山資料館常設展時資料
- ・ 横瀬町歴史民俗資料館常設展時資料